秋田県文化財調査報告書第140集

遺跡詳細分布調査報告書

1986・3

秋田県教育委員会

秋田県埋蔵文化財センター

秋田県文化財調査報告書第140集

遺跡詳細分布調査報告書

1986・3

秋田県教育委員会

序

近年各地で急激な地域開発が進行し、これに伴って最も保存の危惧されているものは埋蔵文化財でありますが、それに対する保護行政の最も基本的な仕事が、遺跡分布調査・遺跡範囲確認調査であります。

本報告書は、昭和60年度国庫補助事業として実施した国道バイパス建設(能代市・八竜町・大館市)、同改築(西仙北町)、臨空港七曲工業団地アクセス道路(河辺町)の遺跡分布調査と、早急に対処の必要な開発地区の国道バイパス建設(象潟町)、県道バイパス建設（西仙北町)、広域農免道建設(鹿角市)、工業用地造成(神岡町・平鹿町)の遺跡範囲確認調査の結果を収録したものです。

この報告書が関係者のみならず、県民各位の埋蔵文化財の保護に広く活用されることを望むものであります。

最後に、この調査に御協力いただきました関係各機関に心から感謝の意を表します。

昭和61年 3 月31日

秋田県教育委員会

教育長　斎　藤　　長

例　　言

1、本書は、昭和60年度に秋田県教育委員会が国庫補助を得て実施した、遺跡分布調査と遺跡範囲確認調査の報告である。

2、本書に掲載の遺跡分布調査・遺跡範囲確認調査は、秋田県教育庁文化課と秋田県埋蔵文化財センターの職員及び平鹿町山田貞吉氏が担当した。報文は各担当者の作成したものをそのまま掲載したもので、編集は秋田県埋蔵文化財センターが行った。

3、昭和59年度から実施している市町村単位の遺跡分布調査は、本年度、横手市、湯沢市と仙北郡内町村（10町3村）で行われた。その成果は後日遺跡分布地図として刊行の予定であるため、本書には収録しなかった。同様に、遺跡の発見のなかった「国道13号横手十文字間バイパス遺跡分布調査」についても掲載を省略した。

4、報告に使用した地図は、建設省国土地理院発行の5万分の1地形図、建設省東北地方建設局秋田工事事務所、同本荘国道維持出張所、秋田県土木部仙北土木事務所、同鹿角土木事務所作成の1000分の1の地図である。

目　　次

序
例　言

第１章　はじめに…… 1
第２章　昭和60年度遺跡分布調査・遺跡範囲確認調査実施要項…… 1
　第１節　遺跡分布調査…… 1
　第２節　遺跡範囲確認調査…… 2
第３章　調査の記録…… 5
　第１節　遺跡分布調査…… 5
　　1　一般国道13号刈和野バイパス改築事業…… 5
　　2　一般国道７号（八竜・能代道路）建設事業…… 6
　　3　一般国道103号大館南バイパス建設事業…… 8
　　4　臨空港七曲工業団地アクセス道路建設事業…… 14
　第２節　遺跡範囲確認調査…… 16
　　1　一般国道７号小砂川バイパス建設事業…… 16
　　カウヤ遺跡…… 16
　　2　一般国道13号横山バイパス建設事業…… 23
　　大杉沢遺跡…… 23
　　3　県道本荘・西仙北・角館線バイパス建設事業…… 30
　　上雨堤遺跡…… 30
　　4　鹿角市西山地区広域農免道建設事業…… 32
　　太田谷地遺跡…… 34
　　高屋館跡…… 39
　　堪忍沢遺跡…… 44
　　高瀬館跡…… 48
　　5　工場用地造成事業…… 50
　　岳下遺跡…… 50
　　年子狐遺跡…… 59

図版目次

図版１　カウヤ遺跡近景……20
図版２　カウヤ遺跡調査状況・第３トレンチの土層……21
図版３　カウヤ遺跡第３トレンチ・出土土器……22
図版４　大杉沢遺跡遠景・近景……26
図版５　大杉沢遺跡溝状遺構……27
図版６　大杉沢遺跡土壙……28
図版７　大杉沢遺跡出土器・石器……29
図版８　上雨堤遺跡遠景・近景……31
図版９　太田谷地館跡近景……36
図版10　太田谷地館跡第１トレンチ・第３トレンチ……37
図版11　太田谷地館跡第１トレンチの土壙・出土土器……38
図版12　高屋館跡近景（南端）（北端）……41
図版13　高屋館跡Ａトレンチと配石・Ｂトレンチ……42
図版14　高屋館跡出土土器……43
図版15　堪忍沢遺跡遠景・土壙……46
図版16　堪忍沢遺跡竪穴状遺構・出土土器・鉄滓……47
図版17　高瀬館跡近景・溝状遺構……49
図版18　岳下遺跡遠景……54
図版19　岳下遺跡調査状況・埋設土器出土状況……55
図版20　岳下遺跡出土石器・石製品……56
図版21　岳下遺跡出土土偶・土製品……57
図版22　岳下遺跡出土土器……58
図版23　年子狐Ⅱ遺跡調査状況・溝状遺構……61
図版24　年子狐Ⅱ遺跡出土土器……62

挿図目次

第１図　遺跡分布・遺跡範囲確認調査地……3
第２図　刈和野バイパス遺跡位置図……5
第３図　国道７号（八竜・能代道路）遺跡位置図……7
第４図　国道103号大館南バイパス関係遺跡位置図……9
第５図　上の山Ⅱ遺跡（No.２）、上の山Ⅰ遺跡（No.３）、山館跡（No.３）範囲推定図……10
第６図　餌釣遺跡（No.４）範囲推定図……11
第７図　山王台遺跡（No.５）柄沢狐台遺跡（No.６）範囲推定図……12
第８図　池内Ａ遺跡（No.７）範囲推定図……13
第９図　臨空港七曲工業団地アクセス道路遺跡位置図……15
第10図　カウヤ遺跡位置図……18
第11図　カウヤ遺跡範囲図……19
第12図　大杉沢遺跡位置図……24
第13図　大杉沢遺跡範囲図……25
第14図　上雨堤遺跡位置図……30
第15図　鹿角市西山地区広域農免道遺跡位置図……33
第16図　太田谷地館跡範囲図……35
第17図　高屋館跡範囲図……40
第18図　堪忍沢遺跡範囲図……45
第19図　高瀬館跡範囲図……48
第20図　岳下遺跡位置図……51
第21図　岳下遺跡範囲図……52
第22図　年子狐Ⅱ遺跡位置図……60
第23図　年子狐Ⅱ遺跡範囲図……60

表目次

第１表　カウヤ遺跡各トレンチの調査結果……17
第２表　岳下遺跡各トレンチの遺物出土量……53

第１章　はじめに

国庫補助を得て実施した昭和60年度の遺跡詳細分布調査は、一般国道７号・13号・103号のバイパス関係と臨空港七曲工業団地アクセス道路の遺跡分布調査及び、一般国道７号・13号と県道本荘・西仙北・角館線のバイパス関係・広域農道関係、工場用地造成に係わる11遺跡の範囲確認調査である。この調査は既に策定してある調査実施要項に基づいて秋田県教育庁文化課秋田県埋蔵文化財センター職員等が昭和60年４月から同年12月にかけて実施したものである。遺跡分布調査では事業予定地で16遺跡が確認された。

第２章　昭和60年度遺跡分布調査・遺跡範囲確認調査実施要項

第１節　遺跡分布調査

１．調査の目的

一般国道・県道バイパス計画路線・工業団地アクセス道路計画路線上を踏査して遺跡の有無を確認し、遺跡の保護策を講ずるものである。

２．調査の方法

① 計画路線の範囲内で遺物の表面採集及び試掘調査を実施して、遺跡の所在を確認する。

② 調査の期間は１～５日間とし、土地の人々の遺跡についての情報を活用する。

③ 確認された遺跡を地図へ記入するなどの記録は、必ず現場で行う。

④ 遺跡の現況・遠景は必ず写真撮影する。同時に遺跡にいたる経路・目標をくわしく記録し、はじめての人でもまよわず現場に到着できるようにする。

⑤ 散布している遺物と立地を手がかりに、できるだけ遺跡の時代や性格を判定するよう努力する。

⑥ 使用する地図は５万分の１地形図と、開発部局で作成した図面とする。

３・調査主体者

秋田県教育委員会

4．調査担当者

秋田県教育庁文化課	学芸主事	冨樫　泰時
秋田県埋蔵文化財センター	社会教育主事	熊谷　太郎
	文化財主事	児玉　　準
	文化財主事	小林　　克
	文化財主事	栗沢　光男

5．事業名・調査対象地域・確認遺跡

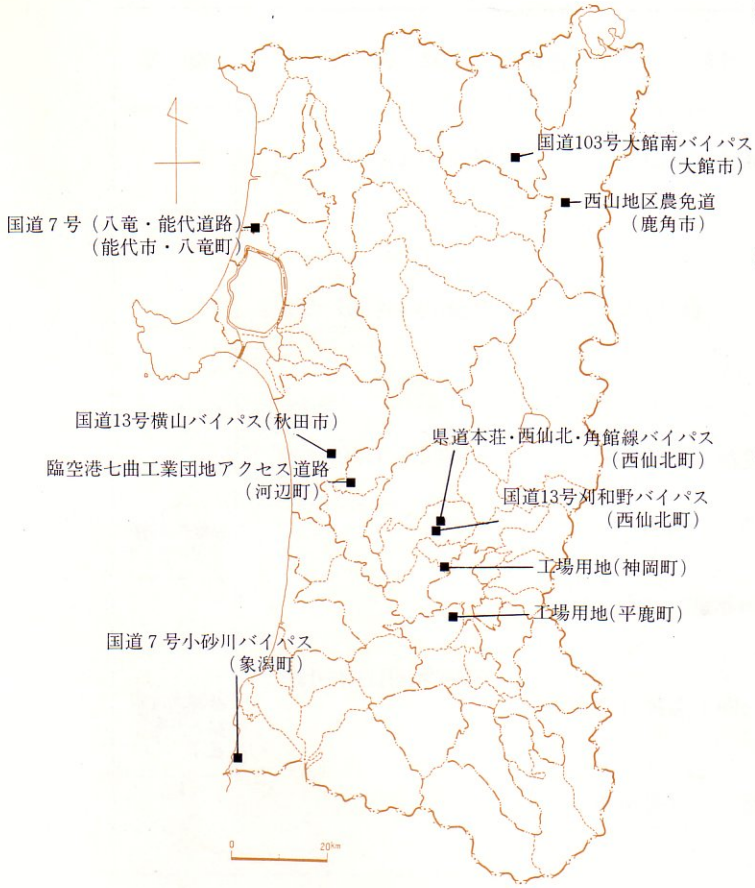
事業名及び調査対象地域	調査期間及び期日	確　認　遺　跡
一般国道13号刈和野バイパス改築事業　（西仙北町）	昭和60年12月９日	寄騎館跡・笹原台遺跡
一般国道103号バイパス建設事業（大館市・比内町）	昭和60年10月８日・９日	上の山Ⅱ遺跡ほか６遺跡
一般国道７号（八竜・能代道路）建設事業　（能代市・八竜町）	昭和60年７月４日、10月30日	館ノ上遺跡ほか６遺跡
臨空港七曲工業団地アクセス道路建設事業　（河辺町）	昭和60年11月29日	石坂台Ⅻ遺跡ほか３遺跡

第２節　遺跡範囲確認調査

1．調査の目的

一般国道・県道バイパス工事、広域農免道工事、工場用地造成などの開発事業計画に係わる遺跡の範囲確認調査を実施して、埋蔵文化財の保護と保存を計るものである。

2．調査方法



第１図　遺跡分布調査・遺跡範囲確認調査地

(1)　遺跡の広がり、埋没の度合い、時代とその性格を推定するために、当既地域で遺物の表面採集及び小規模の発掘調査（遺構確認面までの掘り下げ）を行う。

(2)　調査の期間を２～12日間とし、その期間内にできるかぎり面的に発掘調査を広げて遺構の確認に努める。

(3)　記録は、確認された遺構・遺物・堆積土層の厚さ、遺物包含層など現場で行う。その際遺跡の全景と発掘調査状況、確認された遺構、遺物などは必ず写真撮影する。

(4)　使用する地形図は、開発部局で作成した一番大きな縮尺図面とし、新規に測量などは行わない。

(5)　遺跡の立地条件などに即した適切な調査とする。

3．調査主体者

秋田県教育委員会

4．調査担当者

秋田県埋蔵文化財センター	学芸主事	船木　義勝
	社会教育主事	熊谷　太郎
	文化財主事	柴田陽一郎
	文化財主事	児玉　　準
	文化財主事	小林　　克
	文化財主事	栗沢　光男
平 鹿 町		山田　貞吉

5．事業名・調査対象遺跡・調査期間ほか

事　業　名	遺跡名（遺跡No.）及び所在地	調　査　期　間	摘　要
一般国道７号バイパス建設事業	カウヤ遺跡（象潟町）	昭和60年４月15日～20日	
一般国道13号バイパス建設事業	大杉沢遺跡（秋田市）	昭和60年４月23日～26日	
県道バイパス建設事業	上雨堤遺跡（西仙北町）	昭和60年５月16日・17日	
広域農免道建設事業	中畑遺跡　（鹿角市）（No.１）	昭和60年10月14日～19日	路線内は遺跡と認定できず
	太田谷地館跡（鹿角市）（No.２）		
	用野目川向Ⅰ遺跡（鹿角市）（No.３）		路線内は遺跡と認定できず
	高屋館跡　（鹿角市）（No.７）		
	堪忍沢遺跡　（鹿角市）（No.６）	昭和60年６月10日～12日	
	高瀬館跡　（鹿角市）（No.８）		
工場用地造成事業	岳下遺跡　（神岡町）	昭和60年４月15日～27日	
	年子狐Ⅱ遺跡　（平鹿町）	昭和60年９月25日～10月５日	

第３章　　調査の記録

第１節　遺跡分布調査

１．一般国道13号刈和野バイパス改築事業

１．調査期日　　昭和60年12月９日

２．調査担当者　　熊谷太郎、児玉　準

３．確認遺跡

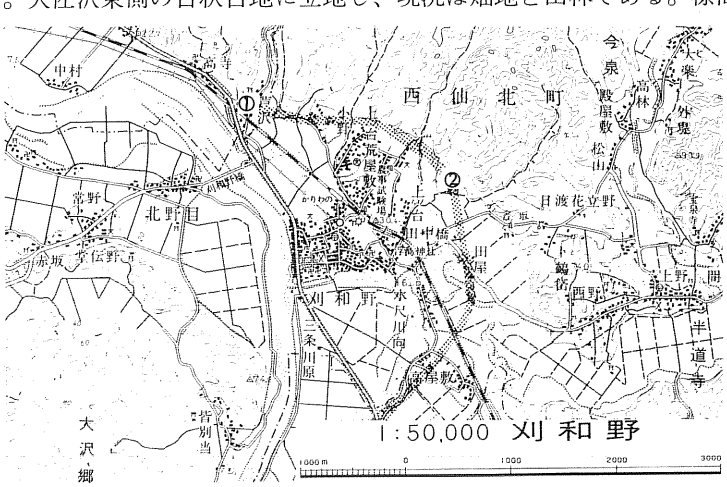
計画されている刈和野バイパスは、国道13号仙北郡西仙北町高屋敷地内から同町刈和野の東方を通過し、同郡協和町峰吉川芦沢通地内で再び国道13号に合流する全長約5,5kmのバイパスである。昭和59年12月３日に第一次の踏査が行われ、その際遺跡の占地の可能性が強い地形を持つ地点が６箇所確認されたため、本年度はこれの路線に係わる部分の試掘を行い最終的に遺跡確認を行ったものである。

(1)　寄騎館跡　　仙北郡協和町峰吉川芦沢通29他

「秋田県の中世城館」に収録されている遺跡である。路線に係わる部分は延長35mで、縄文時代後期の土器が採集できたことから、縄文時代と中世の複合遺跡と考えられる。標高は30m、現況は畑地である。

(2)　笹原台遺跡　　仙北郡西仙北町刈和野字笹原台31他

縄文時代中期・後期の土器が採集されたことから、縄文時代の遺跡と判断される。大佐沢東側の舌状台地に立地し、現況は畑地と山林である。標高は27m。



第２図　刈和野バイパス遺跡位置図

▨バイパス予定路線　①寄騎館跡　②笹原台遺跡

2．一般国道７号（八竜・能代道路）建設事業

1．調査期日　　昭和60年７月４日、昭和60年10月30日

2．調査担当者　　冨樫泰時

3．予定路線の状況

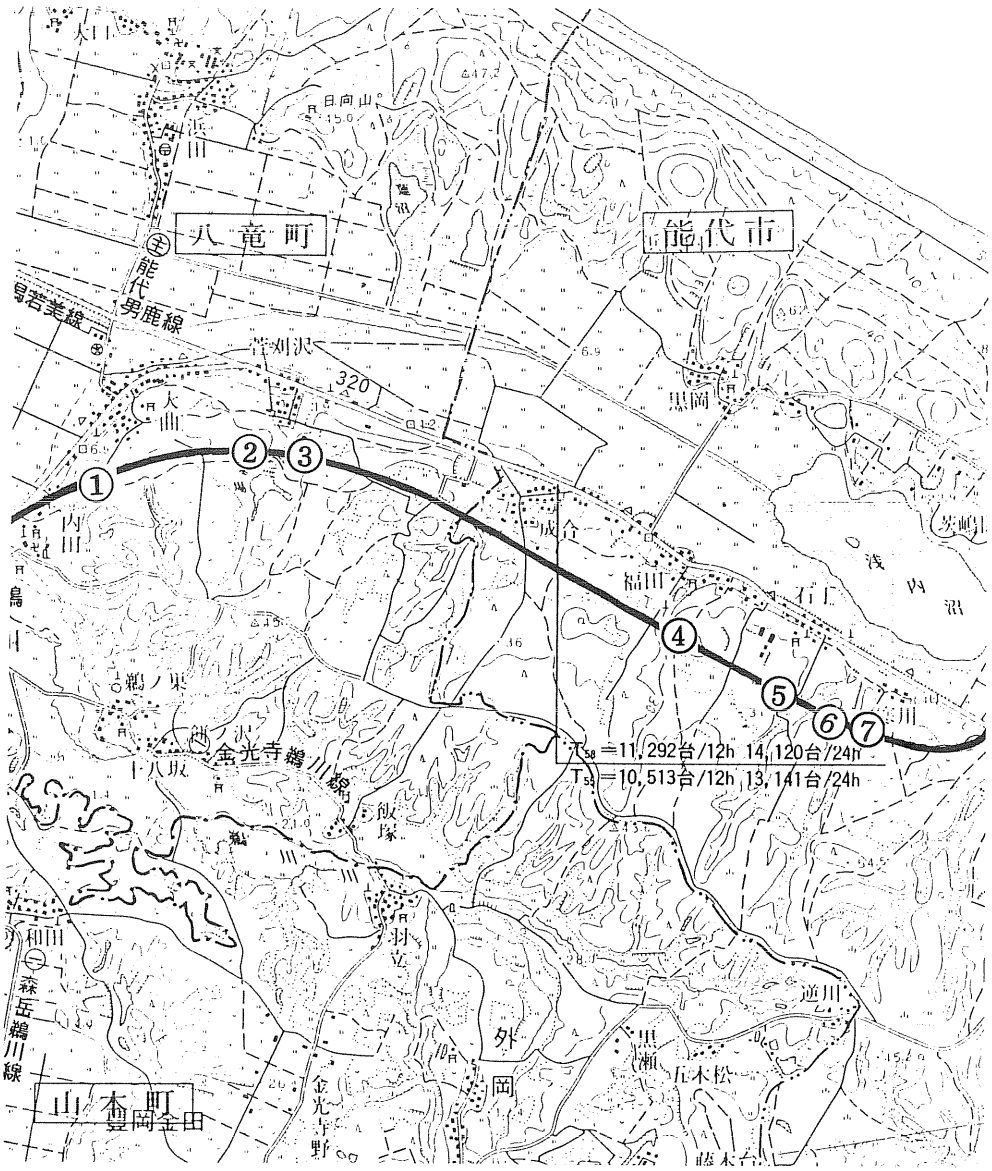
国道７号（八竜・能代道路）予定線は、八竜町内田で現在の７号線から分れ能代市寒川集落の北方にいたる全長７㎞である。この予定路線は現在の国道７号の東側、標高40m前後の台地上を通る。その現状は畑地がほとんどで、他に山林、水田等がある。台地は八郎潟東部第２段丘と呼ばれているもので、米代川左岸でもっとも広く分布している。この段丘は東西に走る小さな沢によって開析され、各沢の中流域には堤防を築き、堤としてかんがい用水池として古くから活用されてきた。その代表的なものに寒堤がある。

遺跡は台地の縁辺部と各沢沿いに確認されており、県指定史跡萱刈沢貝塚ノ館ノ上遺跡、萱刈沢遺跡、寒川遺跡などが周知の遺跡となっている。

4．確認遺跡

２日間の踏査によって周知の遺跡を含めて下記のとおり７遺跡の存在が確認された。これらの遺跡は将来範囲確認調査され、その広がりと性格等を明らかにする必要がある。

No.	遺　跡　名	時　代	摘　　要
1	館ノ上遺跡	縄文・弥生	台地の縁辺部にあり、かなり広い範囲に遺物が散布している。
2	萱刈沢Ⅰ遺跡	縄文時代	寒堤の南側にある。縄文時代晩期の遺物が採集された。
3	萱刈沢Ⅱ遺跡	縄文時代	寒堤の北側にある。時期不明。
4	福 田 遺 跡	平安時代	福田集落の東側、遺跡の南側が沢および堤である。
5	石 丁 遺 跡	平安時代	石丁に下る農道と沢の間の山林。時期不明。
6	十二林遺跡	平安時代	二つの沢に挟まれた台地上にある。
7	寒 川 遺 跡	平安時代	遺跡の南側が沢である。



第３図　国道７号(八竜・能代道跡)遺跡位置図

3．一般国道103号大館南バイパス建設事業

1．調査期日　　昭和60年10月８日・９日

2．調査担当者　　冨樫泰時

3．予定路線の状況

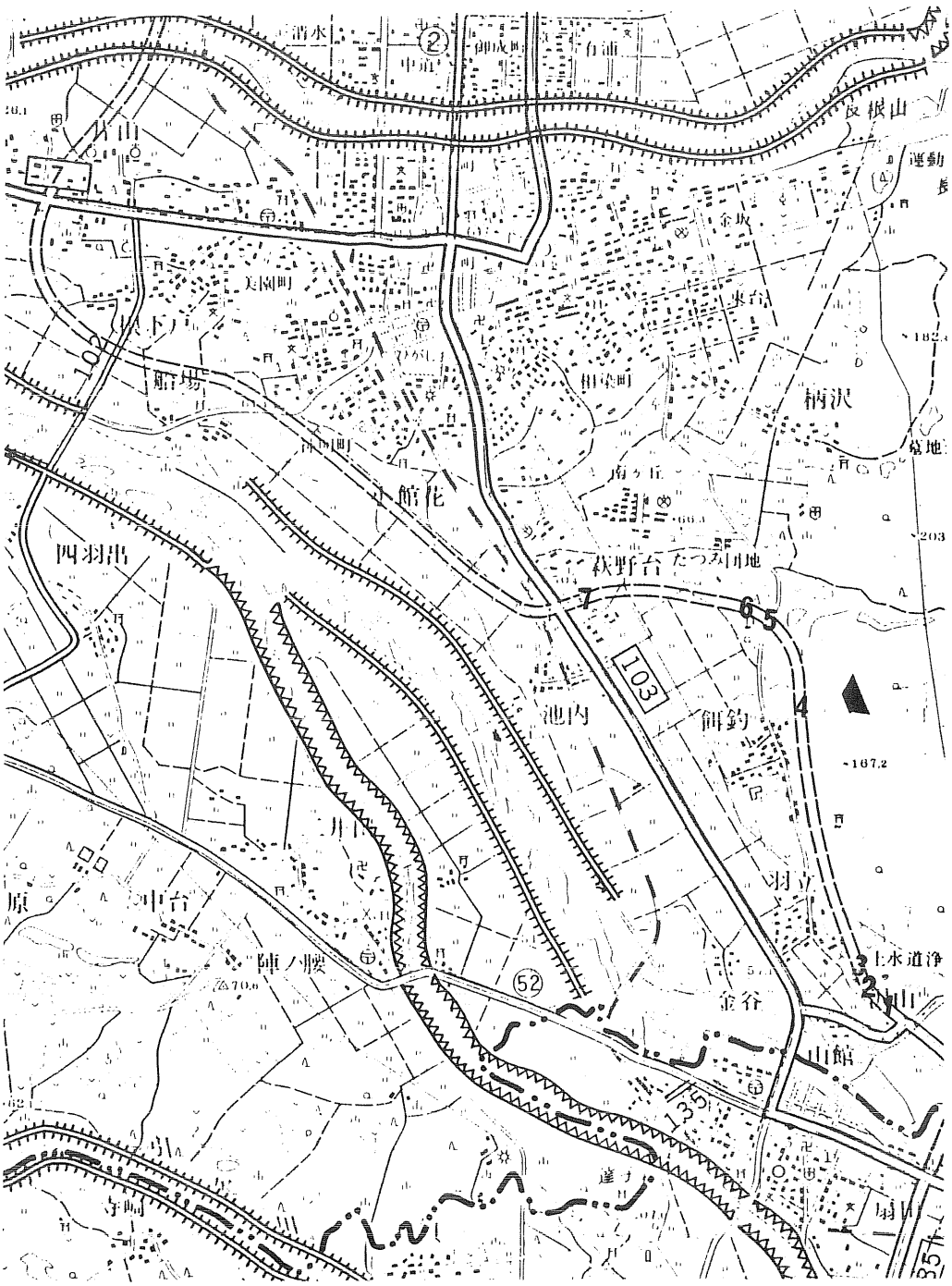
国道103号大館南バイパスは、大館市街地の東端、山館から市街地西側の片山までの全長7677mである。この予定線は山館から萩野台地区までは現在の国道103号の東側台地上を通り、萩野台の西で現在の103号を横切って沖積地（水田）を通過して片山の台地上に通ずるものである。山館から萩野台までの予定路線は米代川の右岸に形成された段丘（標高80～90m）の縁辺部を通過するため周知の遺跡である池内Ａ遺跡、上の山Ⅰ、Ⅱ遺跡など一部にかかることが判明した。

4．確認遺跡

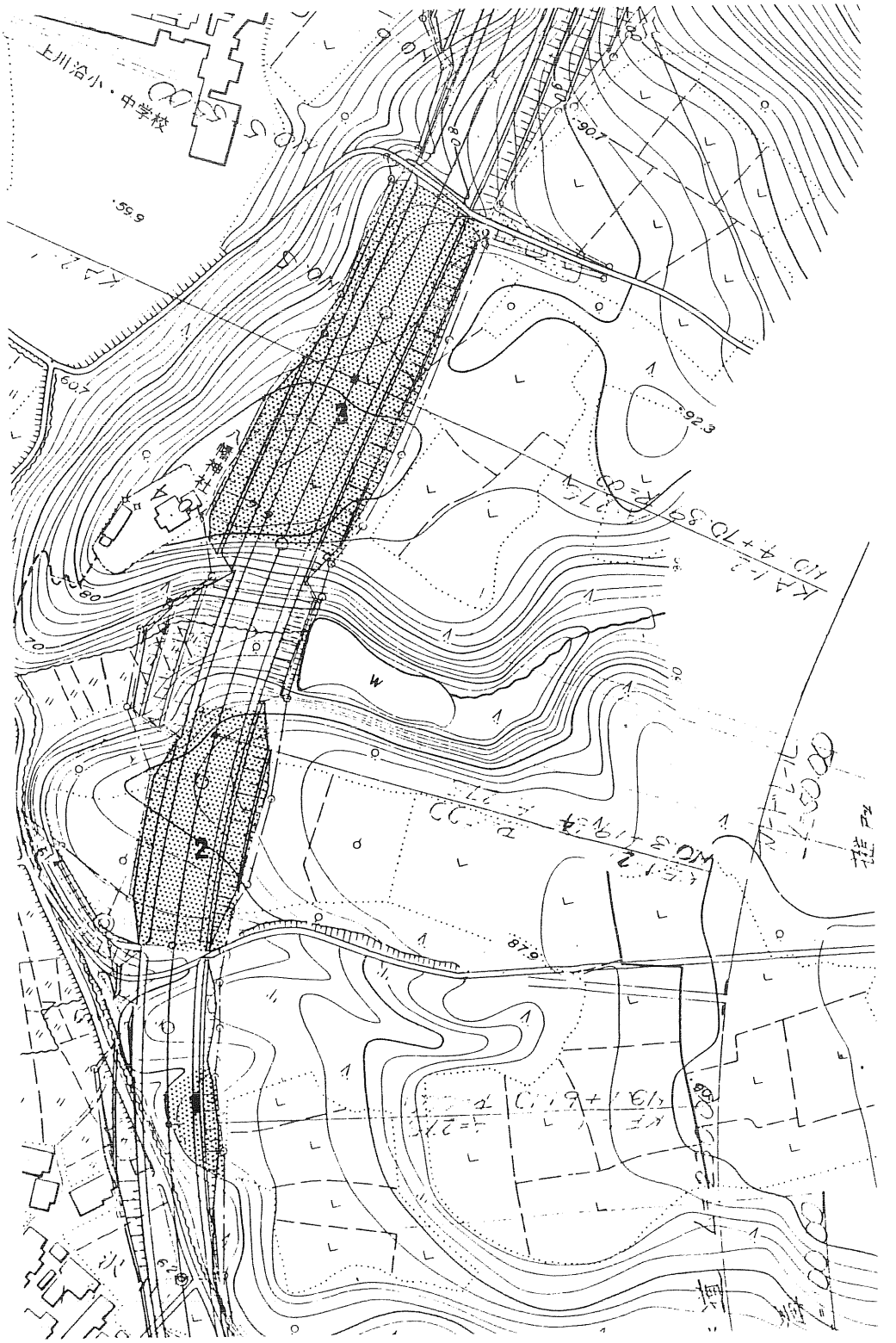
２日間の調査で上記周知の遺跡を含めて７つの遺跡が存在することがわかった。それは下記の表のとおりである。

No.	遺　跡　名	時　代	摘　　要
1	上ノ山Ⅱ遺跡	縄文時代	台地の先端がかかる。晩期遺跡として知られている。畑地。
2	上ノ山Ⅰ遺跡	縄文時代	台地の先端が前期・中期の遺跡として知られている。畑地。
3	山　館　跡	中　　世	館跡で西側に空濠が認められる。山林・畑地。
4	餌 釣 遺 跡		全て山林で時代は明らかでない。
5	山王台館跡	中　　世	館跡で中心は日吉神社周辺と考えられる。山林、畑地。
6	柄沢狐台遺跡	縄文時代	時期不明であるが土器片、石片が採集された。
7	池 内 Ａ 遺 跡	平安時代	古代の集落跡で竪穴住居跡などが検出されている。

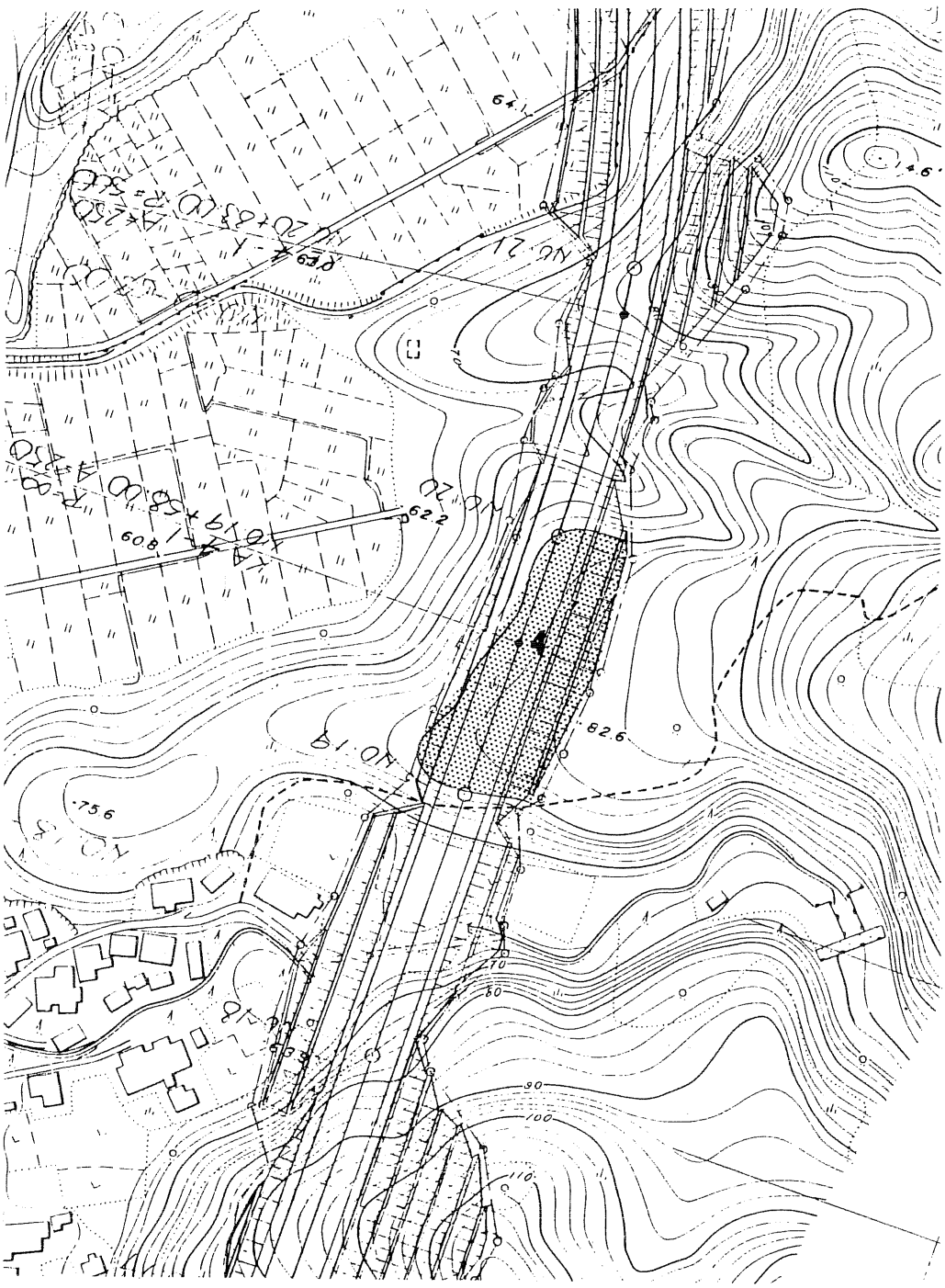
以上７遺跡が確認されたが、遺跡の範囲確認調査によってさらにそれぞれの遺跡の性格を把握する必要がある。



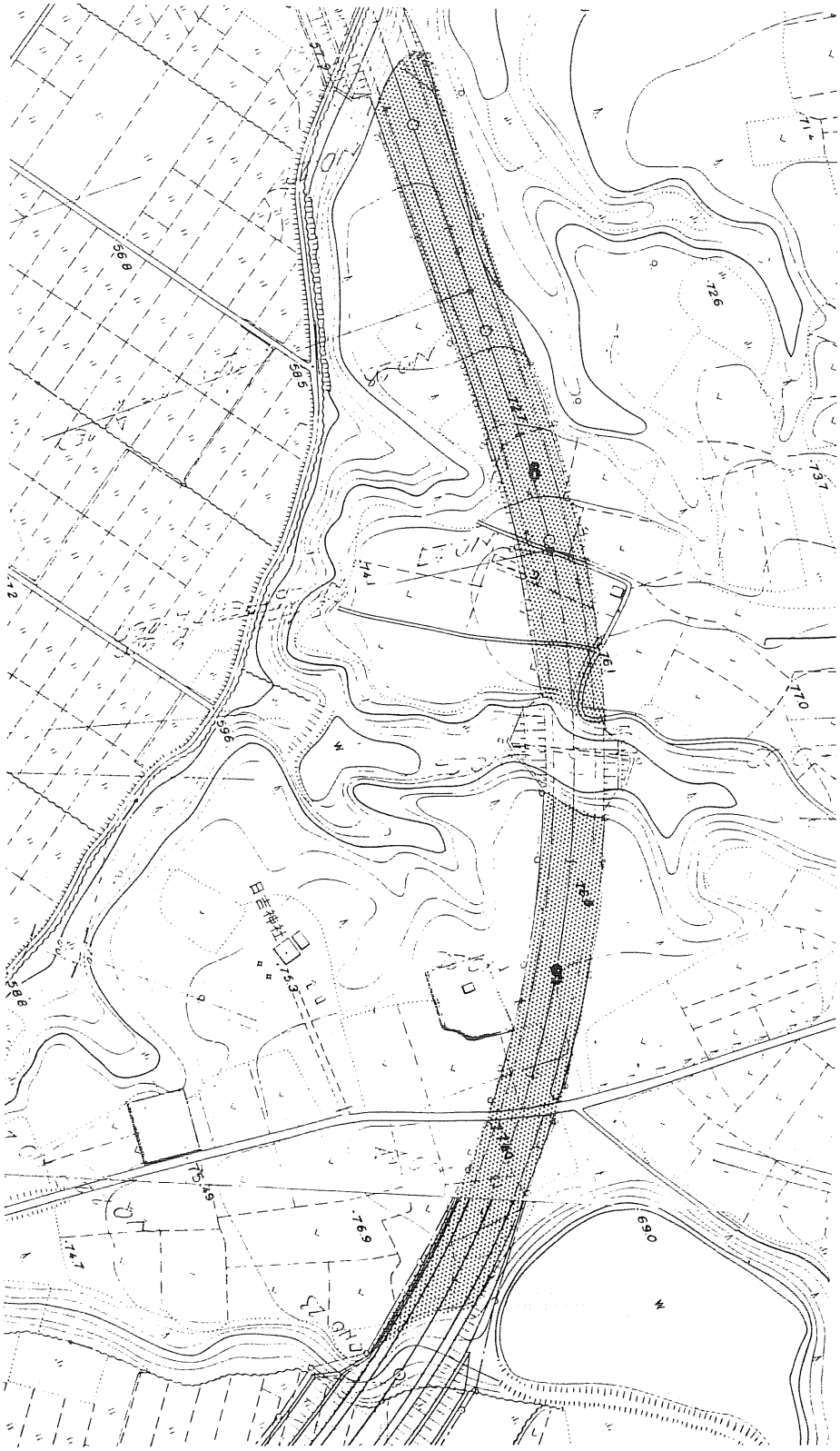
第４図　国道103号大館南バイパス関係遺跡位置図



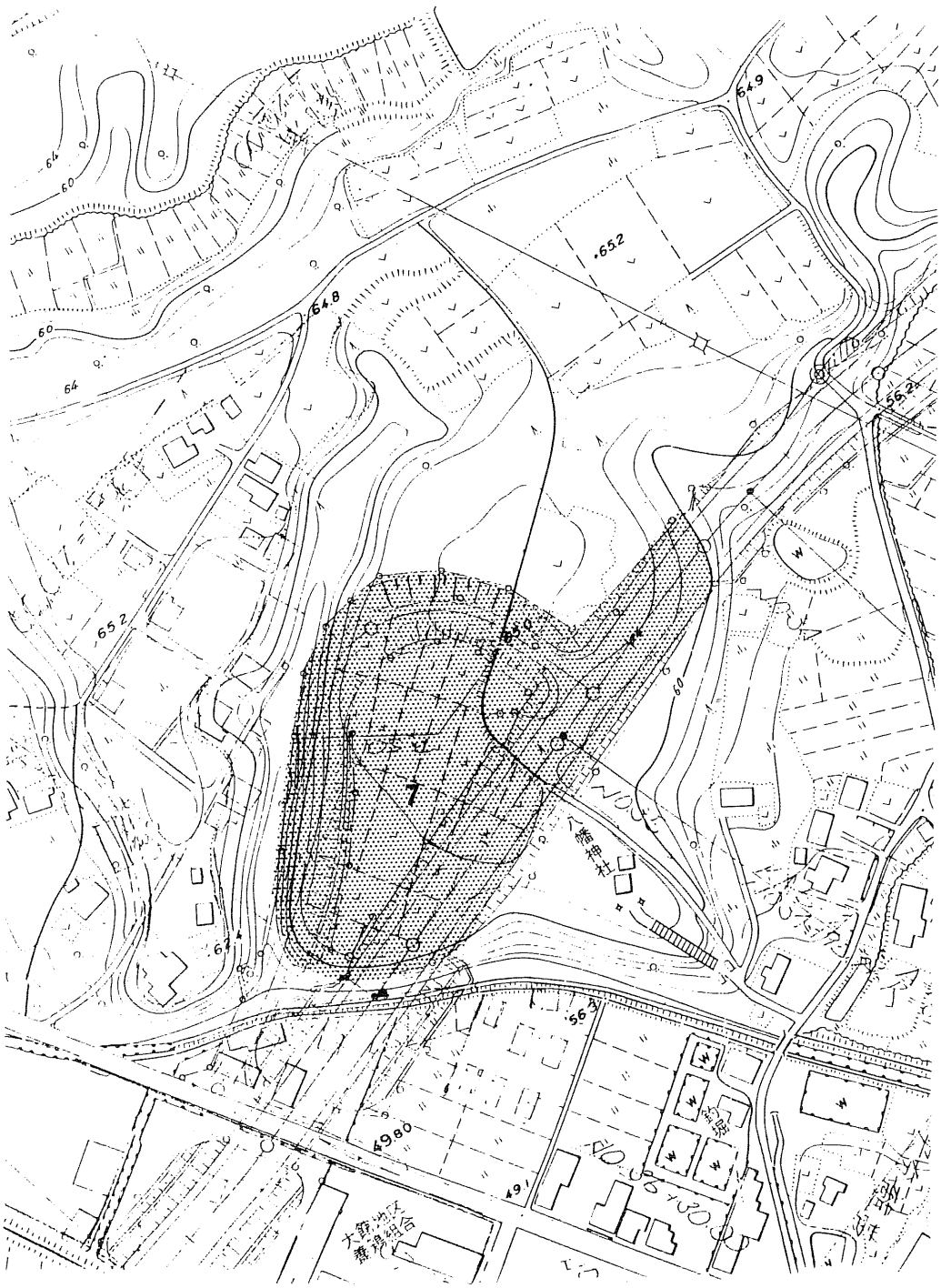
第5図　上の山Ⅱ遺跡(No.1)・上の山Ⅰ遺跡(No.2)・山館跡(No.3)範囲推定図



第6図　餌釣遺跡(No.4)範囲推定図



第7図　山王台館跡(No.5)・柄沢狐台遺跡(No.6)範囲推定図



第8図　池内A遺跡(No.7)範囲推定図

4．臨空港七曲工業団地アクセス道路建設事業

1．調査期日　　昭和60年11月29日

2．調査担当者　　小林　克

3．確認遺跡

臨空港七曲工業団地アクセス道路予定路線は全長1.9km、大部分が山林と原野から成っている。このたび、路線用地買収済で試掘調査可能な部分について調査した。結果、下記の土地から縄文時代、弥生時代、中世の遺物が出土し、遺跡であると確認した。なお、地図上の⑤と⑥は地形立地の上からは遺跡である可能性があるが、今回は調査できなかった箇所である。今後、遺跡であるか否かを確かめる必要がある。

① 石坂台Ⅻ遺跡　　河辺郡河辺町戸島字七曲石坂台

東北横断自動車道秋田線関係遺跡、№36遺跡である。白熊集落の北150mにあり、南側へ張り出した標高45mの台地上に立地する。東北横断自動車道関連の調査では、縄文時代後期、晩期、弥生時代の遺構・遺物が検出されている。

② 駒坂台Ⅰ遺跡　　河辺郡河辺町戸島字駒坂台83番地

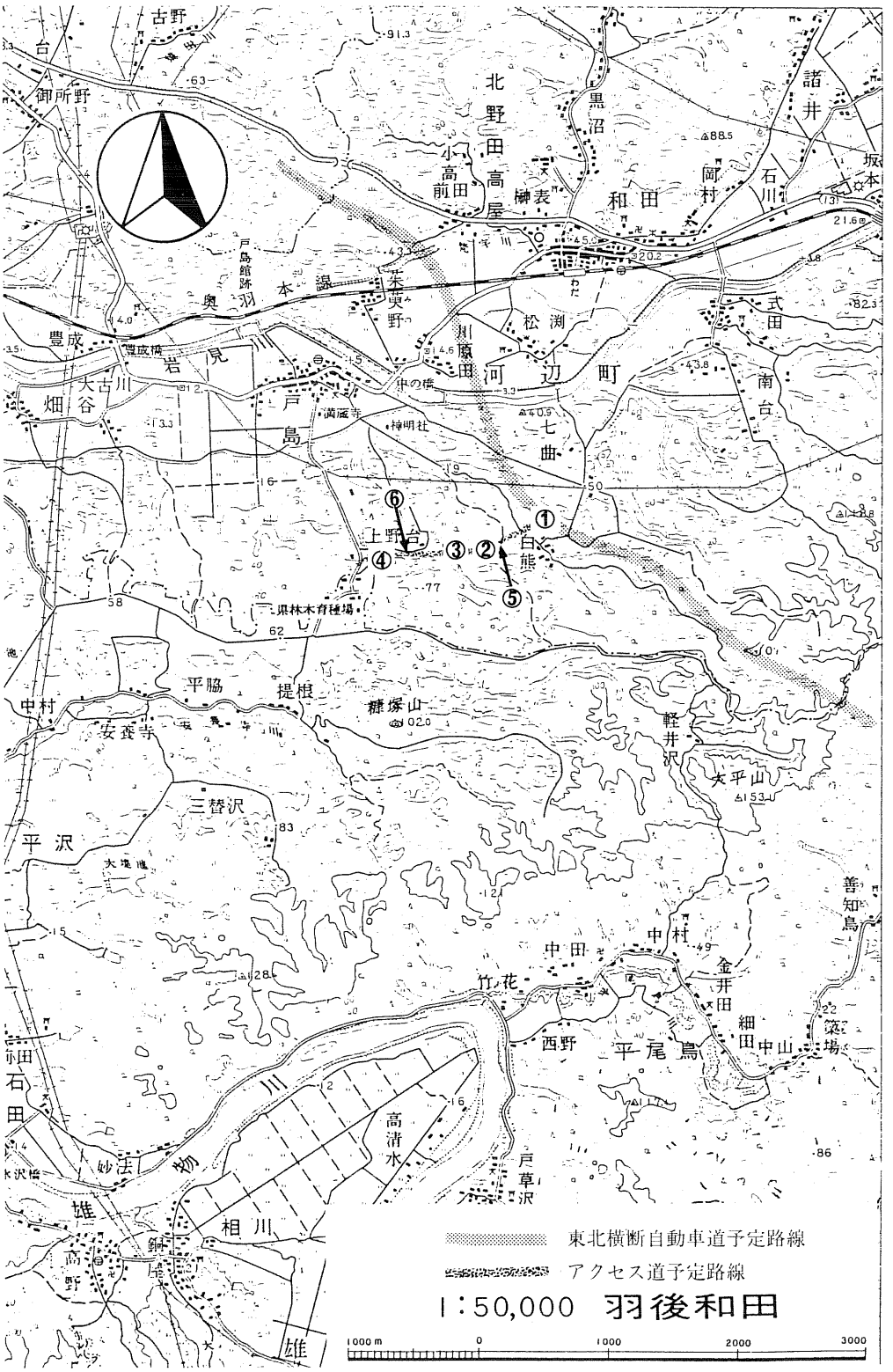
白熊集落の西400mにある。北西方向へ面した緩斜面上の遺跡である。駒坂台Ⅱ遺跡との間は比高－10m程の沢が隔てているが、遺物はこの沢に面した側、すなわち台地西側斜面から出土している。縄文時代の土器片・石器を採集している。現況は雑木林。

③ 駒坂台Ⅱ遺跡　　河辺郡河辺町戸島字駒坂台80番地他

駒坂台Ⅰ遺跡の西側に沢を隔てて隣接する。遺跡の西側にはさらに小さな沢が入っており、東西の幅約40mの狭い台地上がその範囲である。縄文時代の土器片および石器、さらに弥生時代の土器片が採集されている。現況は雑木林。

④ 上祭沢遺跡　　河辺郡河辺町戸島字上祭沢38番地の4

県林業センターの北東300m程にある。北側へ突入した所謂「馬の背」状の台地で、現在雑木林の中を遊歩道が通っている。この遊歩道に沿って6基の塚を確認した。遊歩道敷設の際に寸断された1基は、内部に拳大の礫が詰った状態を露呈している。塚の規模は径およそ1.5～2.0mで、各々は4～5mの等間隔に並ぶ。



第9図　臨空港七曲工業団地アクセス道路遺跡位置図

第２節　　遺跡範囲確認調査

１．一般国道７号小砂川バイパス建設事業

カウヤ遺跡

１．所在地　　由利郡象潟町小砂川字カウヤ58―３他

２．面　積　　工事区域内遺跡面積　2612㎡

３．期　間　　昭和60年４月15日～20日

４．調査担当者　　柴田陽一郎、児玉　準

５．遺跡の立地と現況

東経139°53′10″、北緯39°07′30″の位置にあり、国鉄羽越本線小砂川駅からは南南西約１kmの地点にある。遺跡よりさらに南南西約１kmで秋田・山形両県境に至る。遺跡地は鳥海山起源の火砕泥流堆積物とその上を覆う海岸からの飛砂からなり、標高約30m、西に向って低くなる緩傾斜面で、約200ｍで日本海の汀線に至る。今回の調査地点は昨年度行った発掘調査区域の北東にあり、約3870㎡を調査対象とした。遺跡の現況は昨年同様畑地で、ネギなどを主体として耕作している。

６．範囲・時代・性格

調査予定区域内の主として畑の畦畔に沿って計28本のトレンチを設置した。各トレンチごとの遺構・遺物の有無、堆積土の状態は第１表のとおりである。これによって本調査が必要な範囲は第11図のスクリーントンー枠線内の2612㎡と判断された。

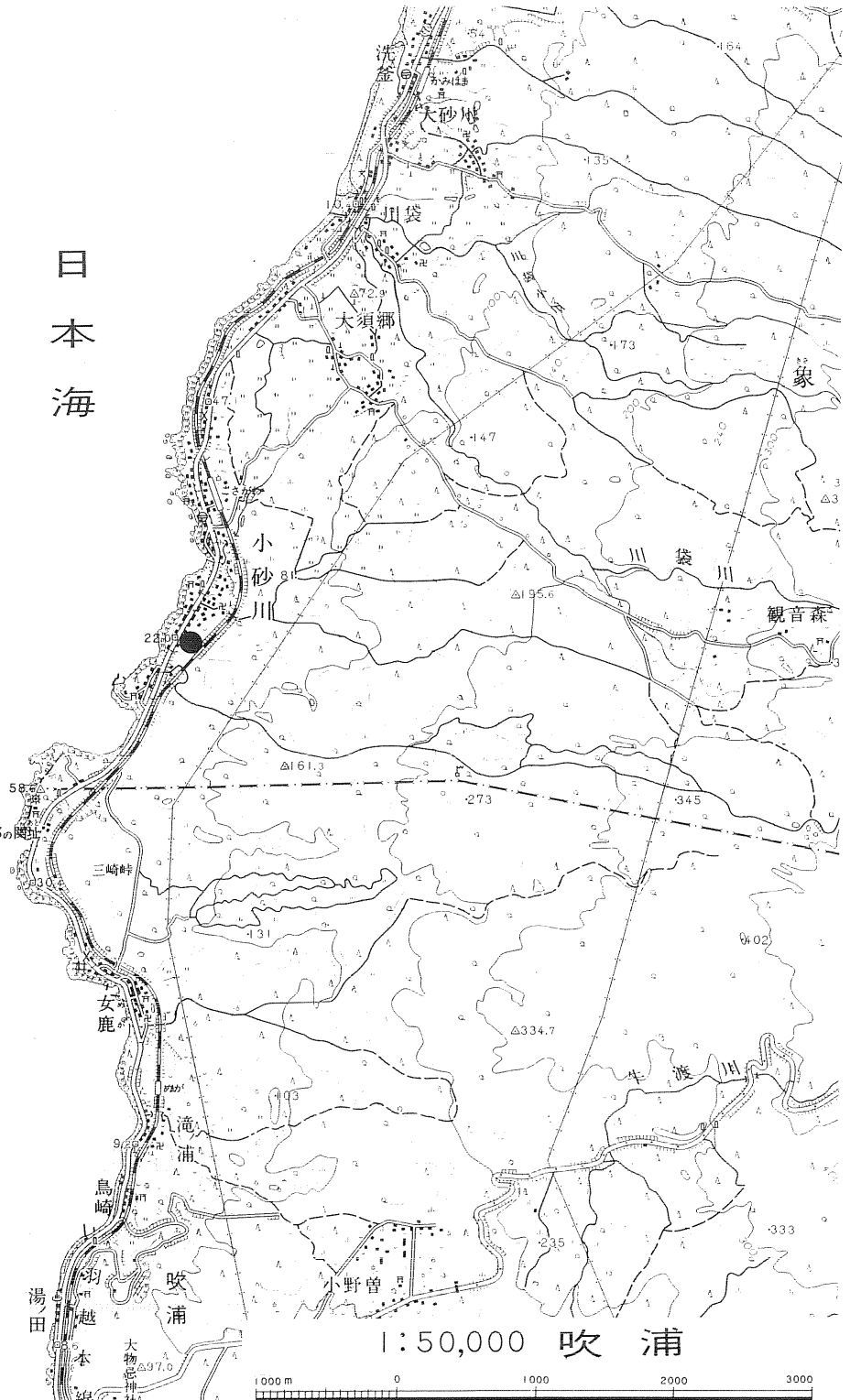
出土遺物は主として平安時代の土師器、須恵器の破片で、粘土紐の継ぎ目が明瞭に見られる製塩土器とされる土師器、土師器杯・甕、須恵器杯・甕・蓋の他、縄文時代後期と推定される土器１片、石錐１点が表面採集によって得られた。これらのことからカウヤ遺跡は、昨年度の発掘調査結果と似て、主として平安時代の製塩関係の遺跡と考えられる他、縄文時代の遺構存在も予測される。

７．土　層

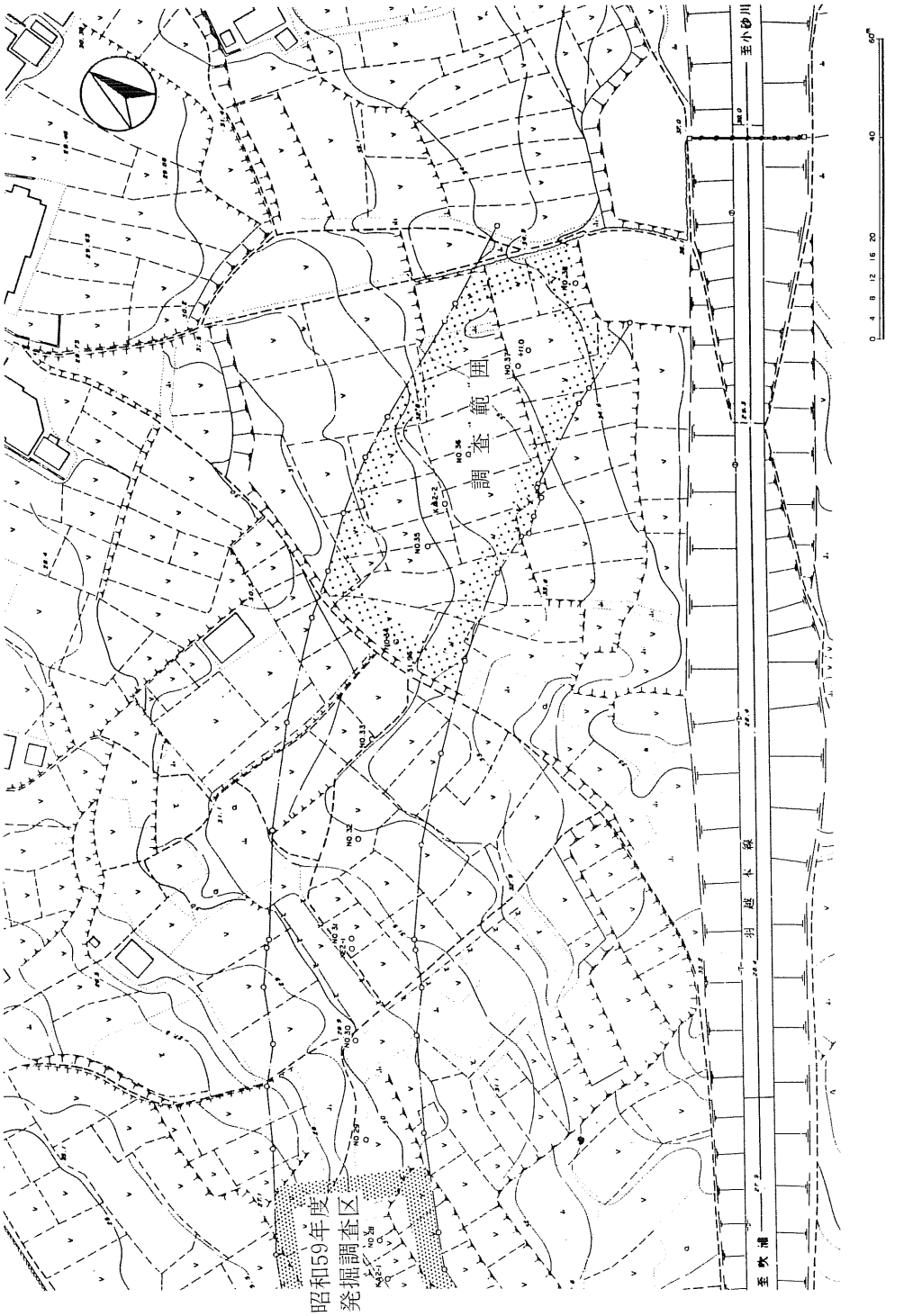
基本土層は第３トレンチを例にとると、第１層褐色砂、耕作土、層厚30～50cm、第Ⅱ層暗褐色砂遺物包含層、層厚20～30cm、第Ⅲ層黄褐色砂、地山となっている。各トレンチの地山までの深さは第１表に記してある。

トレンチNo.	土　層　の　状　態	遺　構	遺　物
1	Ⅰ層10～20cmで地山	な　し	な　し
2	Ⅰ層30～90cmで地山、地山に凹凸あり	な　し	土　師　器
3	Ⅰ層30～50cm、Ⅱ層20～30cm炭化物あり	な　し	土　師　器
4	Ⅰ層30～50cm	中央部に径20cmの範囲で焼土あり	須　恵　器
5	Ⅰ層50cmで地山、西端にⅡ層10cm	な　し	な　し
6	Ⅰ層20～50cm	な　し	土師器・須恵器
7	Ⅰ層20～60cm、Ⅱ層10cm中央部に落ち込みあり	な　し	土　師　器
8	Ⅰ層50～60cm	な　し	な　し
9	Ⅰ層南～中央部は30cm、北端は80cm	な　し	土　師　器
10	Ⅰ層30cm	な　し	土　師　器
11	Ⅰ層30cm、北端にわずかにⅡ層あり	な　し	な　し
12	Ⅰ層30～50cm	な　し	な　し
13	Ⅰ層30～50cm	な　し	な　し
14	Ⅰ層20～30cm	な　し	な　し
15	Ⅰ層50～70cm	な　し	な　し
16	Ⅰ層30cm	な　し	な　し
17	Ⅰ層50cm	な　し	な　し
18	Ⅰ層30～50cm	な　し	な　し
19	Ⅰ層30cm	な　し	な　し
20	Ⅰ層20～30cm	な　し	な　し
21	Ⅰ層30cm	な　し	な　し
22	Ⅰ層60cm	な　し	な　し
23	Ⅰ層50～60cm	な　し	な　し
24	Ⅰ層60～70cm、攪乱多し	な　し	な　し
25	Ⅰ層30～40cm	な　し	な　し
26	Ⅰ層30～40cm	な　し	土　師　器
27	Ⅰ層20～30cm	な　し	な　し
28	Ⅰ層20～30cm	な　し	な　し

第１表　カウヤ遺跡各トレンチの調査結果

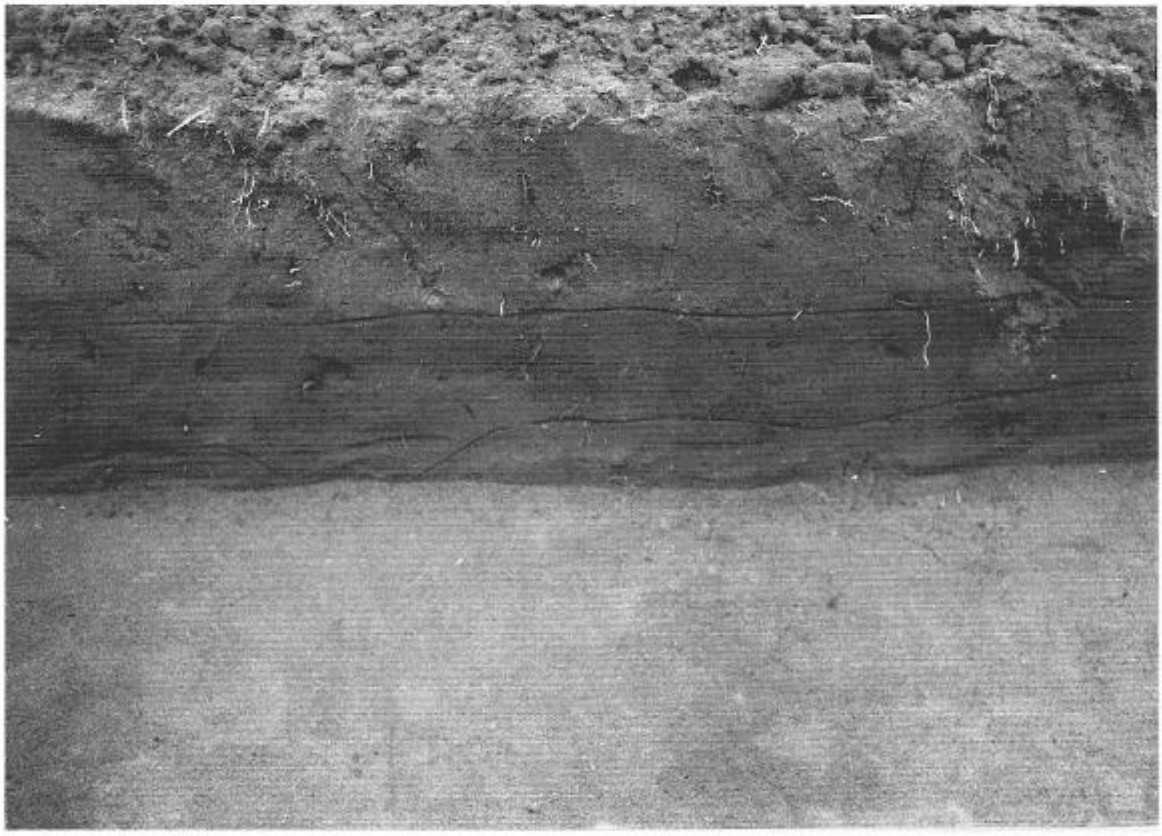


第10図　カウヤ遺跡位置図　　●印　遺跡

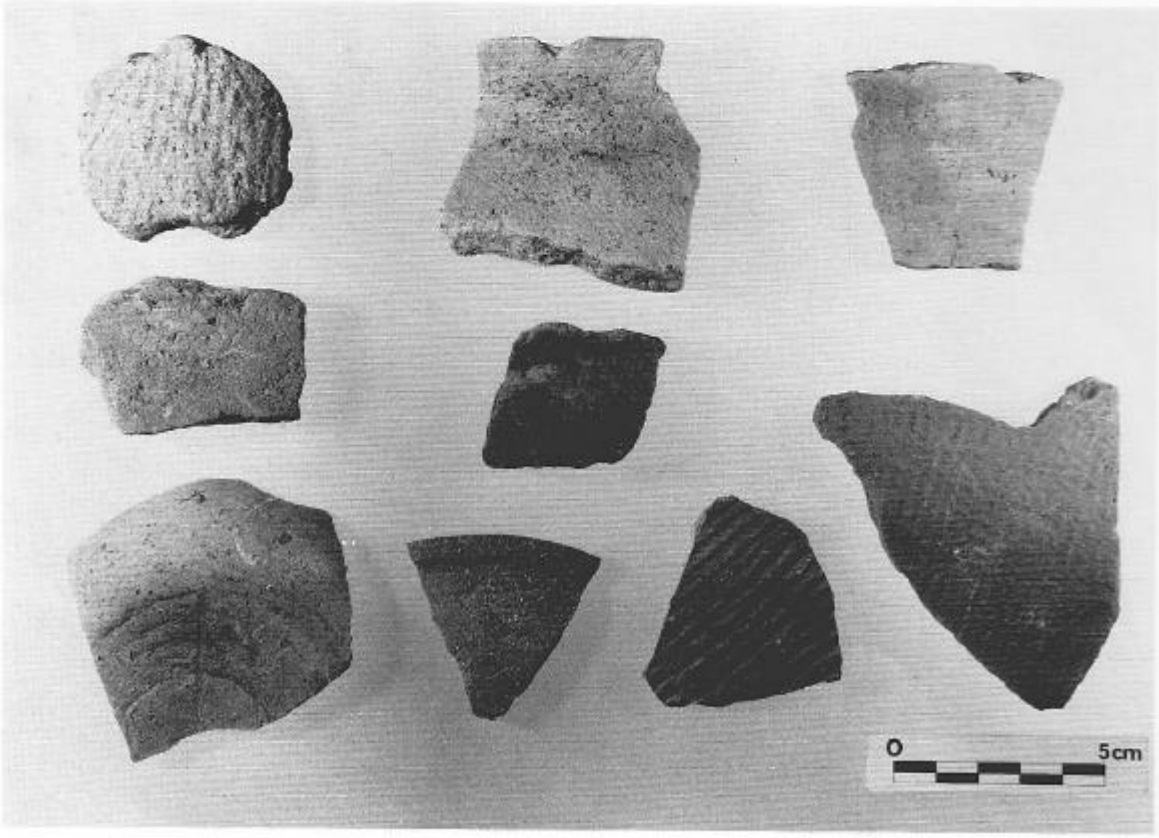


第11図　カウヤ遺跡調査範囲図

図版1　　カウヤ遺跡　上　近景（北▶南）
　　下　近景（南▶北）



図版2　　カウヤ遺跡　上　調査状況
　　下　第3トレンチの土層



図版3　　カウヤ遺跡　上　第3トレンチ
下　出土土器

1．一般国道13号横山バイパス建設事業

大杉沢遺跡

1．所在地　　秋田市四ツ小屋小阿地字大杉沢53番地他

2．面　積　　工事区域内遺跡面積　2800㎡

3．期　間　　昭和60年４月23日～４月26日

4．調査担当者　　熊谷太郎・栗沢光男

5．遺跡の立地と現況

秋田市茨島から国道13号を南進し、仁井田の住宅地を過ぎるとまもなく雄物川によって形成された台地の南端部に至る。遺跡はこの台地の縁辺にある横山集落の背後に位置しており、標高42m前後の舌状に張り出した台地の先端部に所在する。遺跡の下方には秋田平野が広がり、沖積地との比高は15～20mである。現況は畑地であるが、過去に耕地整理が行われている。

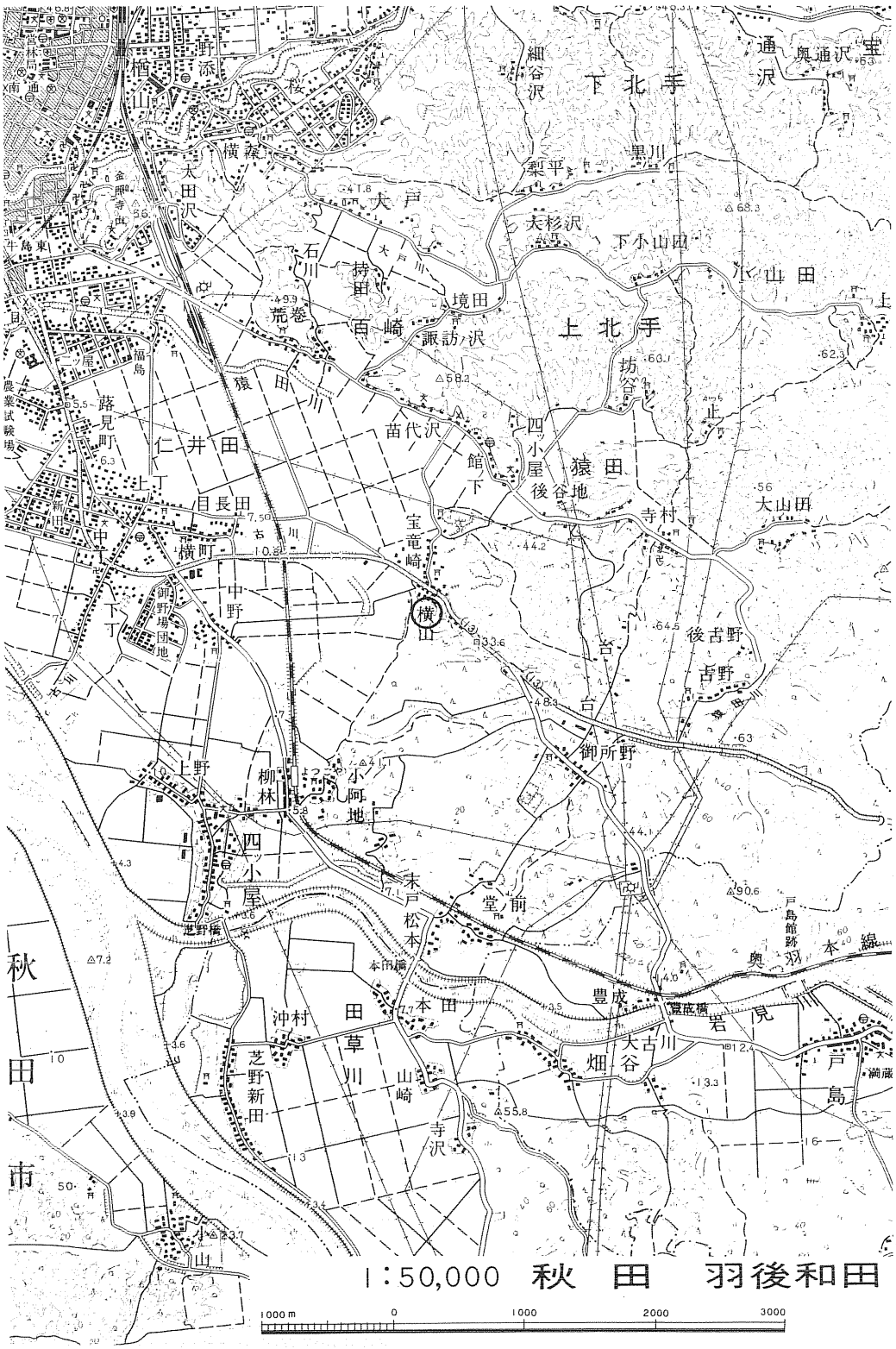
6．範囲・時代・性格

調査による主な出土遺物は縄文土器、石鏃、石錘で、他に須恵器片１点、青白磁片３点、鉄滓２点がある。検出遺構は土壙７基、溝状遺構１条、環状の溝１条である。土壙は台地の中央部に集中しており、確認面及び堆積土上面より縄文土器が出土している。溝状遺構は台地西側の縁部に沿って南北にのびていると思われる。環状の溝は段丘の北側先端部で検出され、堆積土の一部に拳大の礫の混入が認められた。又遺構の東側の一部は斜面にかかっていることから、消失していることも考えられる。径は８ｍある。

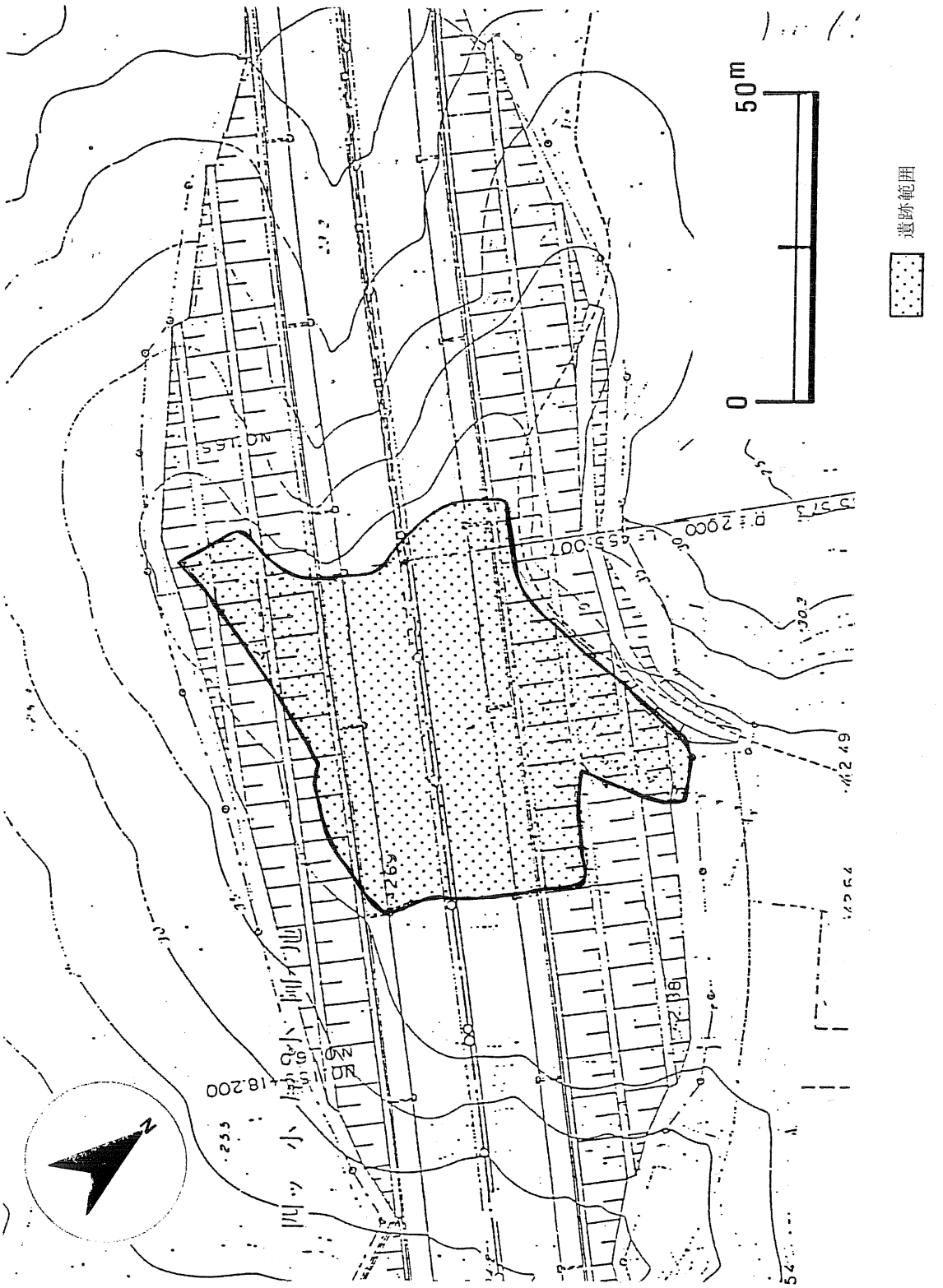
遺物や遺構の検出状況から判断される本遺跡は、縄文時代に主体を置く平安時代、中世の複合遺跡と思われる。遺跡の範囲は第２図に示してある如く、台地中央部から西端部までの2800㎡である。

7．土　層

試掘地点の大部分は10～40cmで地山面に達した。しかし、台地の東・西・南端付近では地山面まで１ｍ前後と深くなっており、地山は緩傾斜の地形を呈している。基本層位は第Ⅰ層が黒色の耕作土で、第Ⅱ層は黒褐色土であるが、台地東部では褐色土ブロックが多量に混入している攪乱層である。第Ⅲ層は主として斜面部分に検出されており、褐色土粒子が少量混入する黒色土層である。

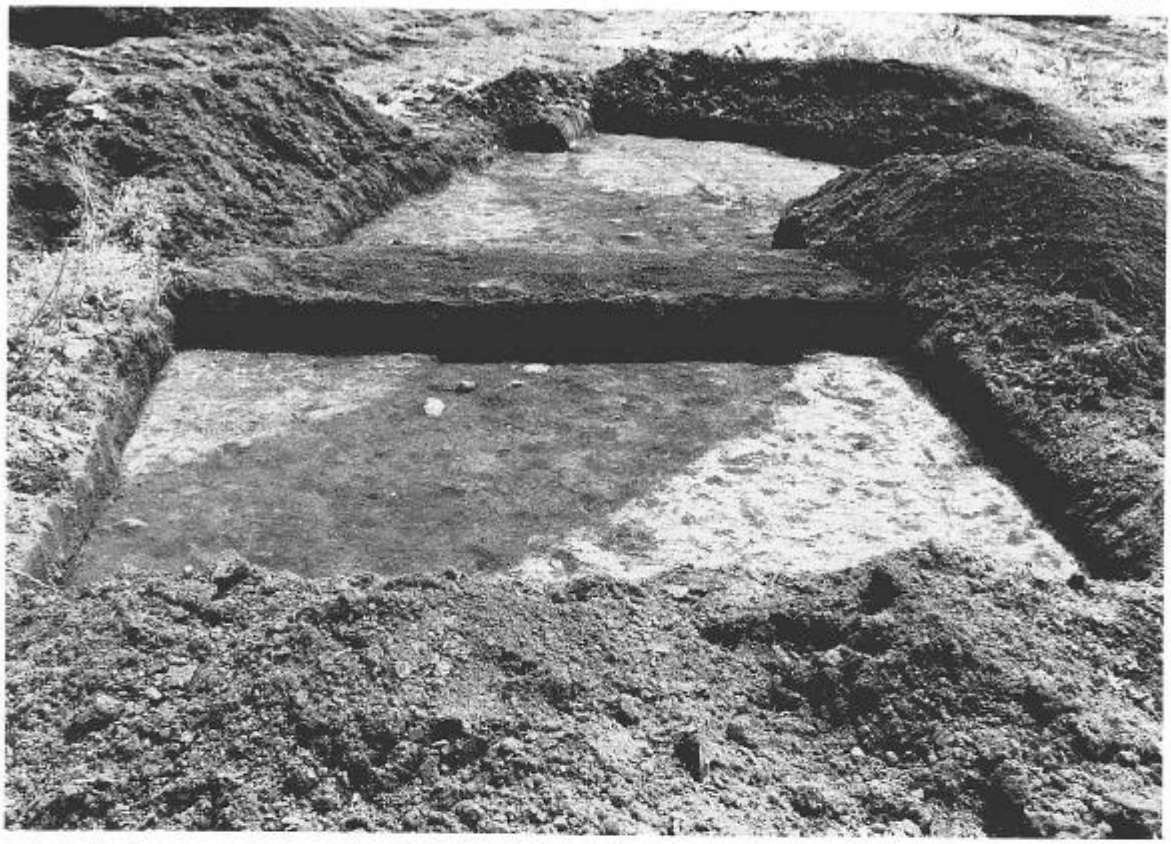


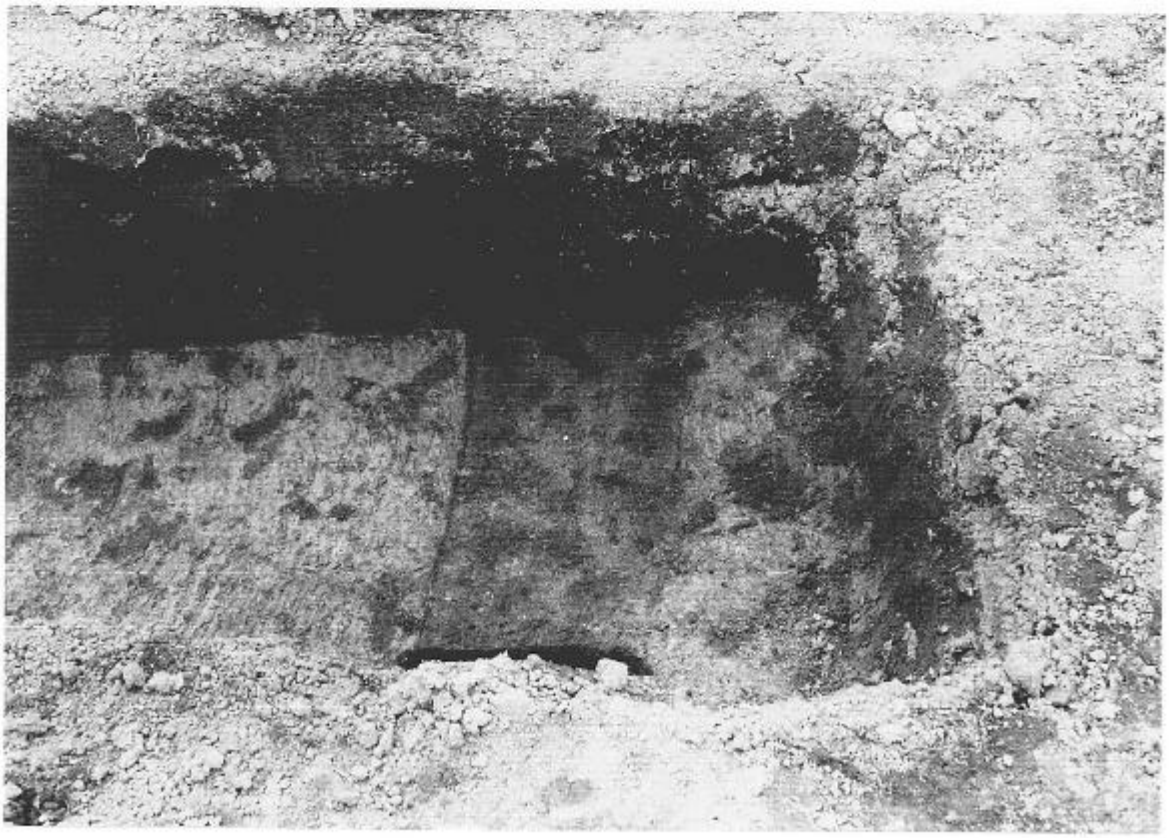
第12図　大杉沢遺跡位置図　　○印　遺跡



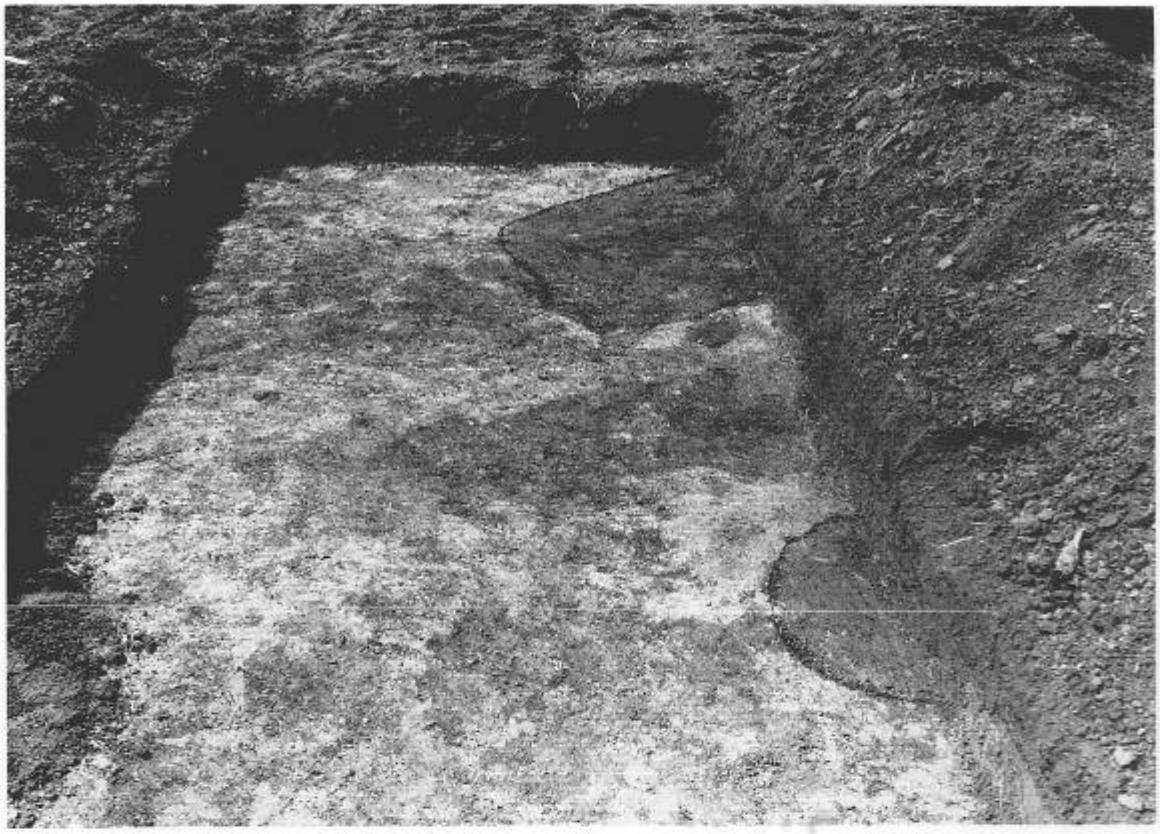
第13図　大杉沢遺跡範囲図

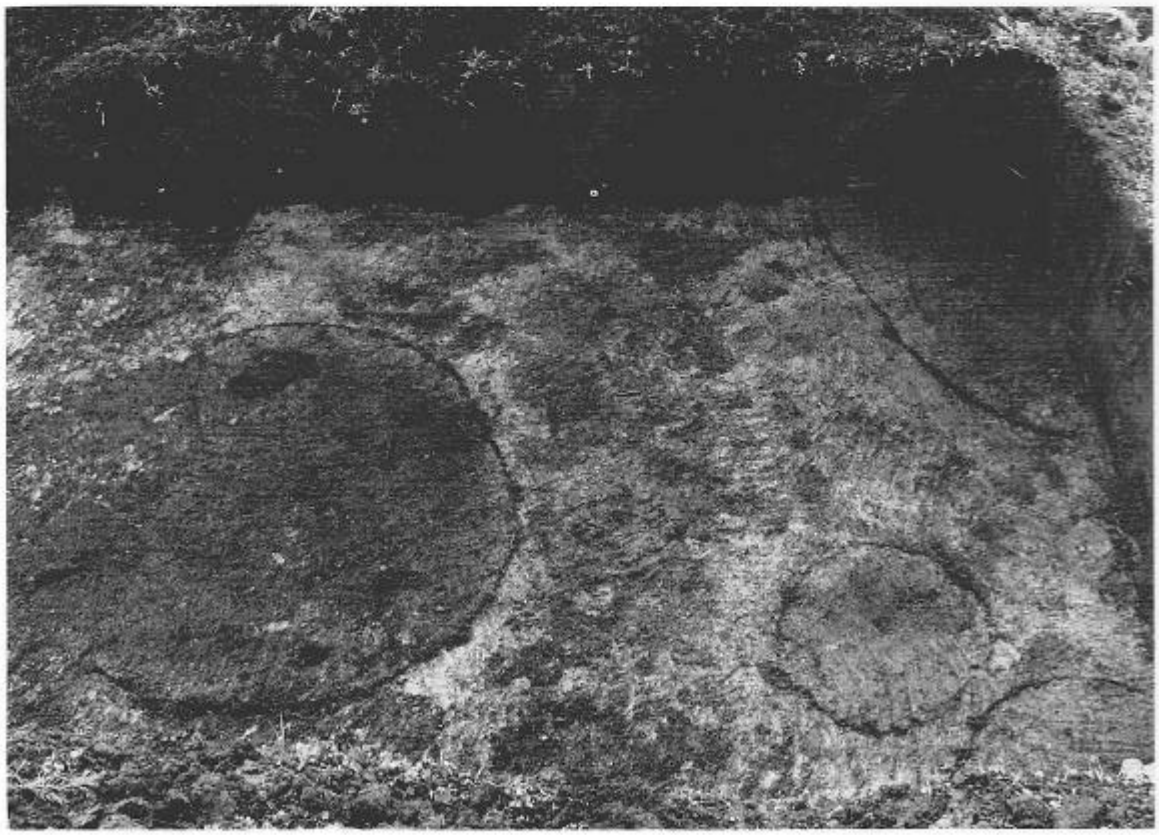
図版4　　大杉沢遺跡　上　遠景
　　下　近景



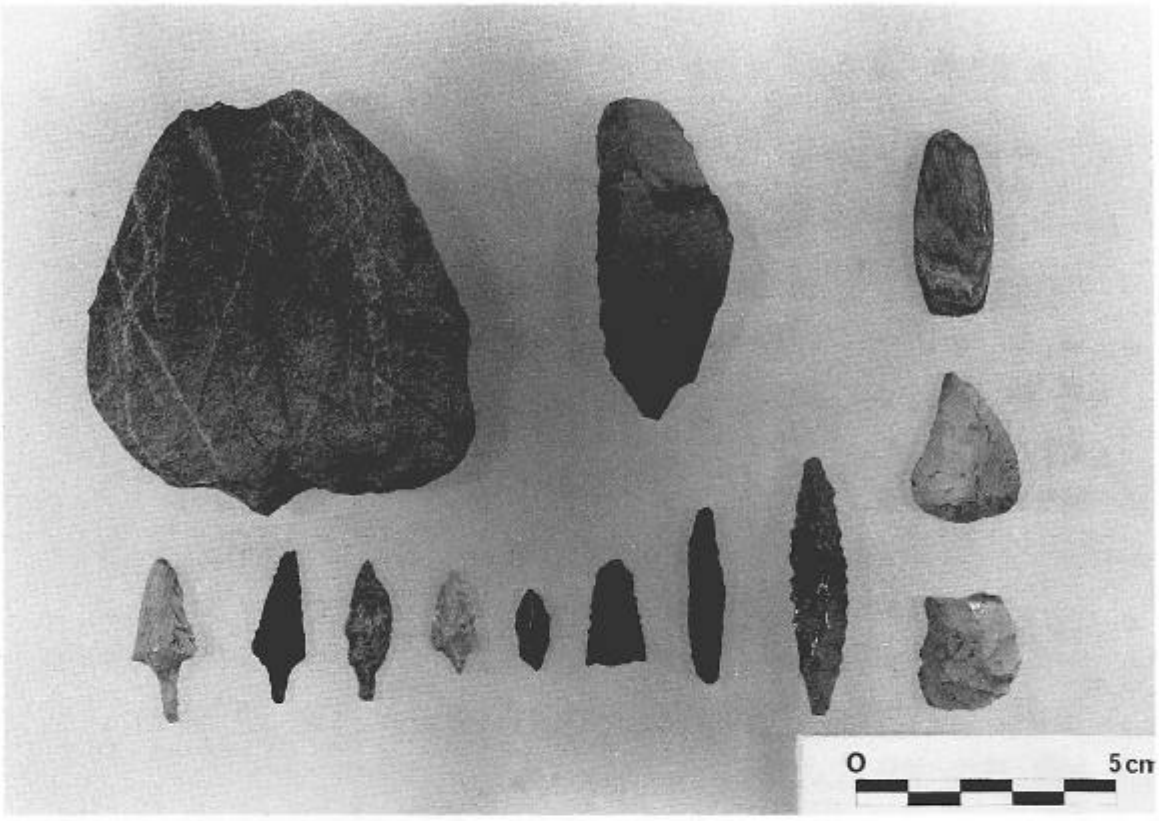


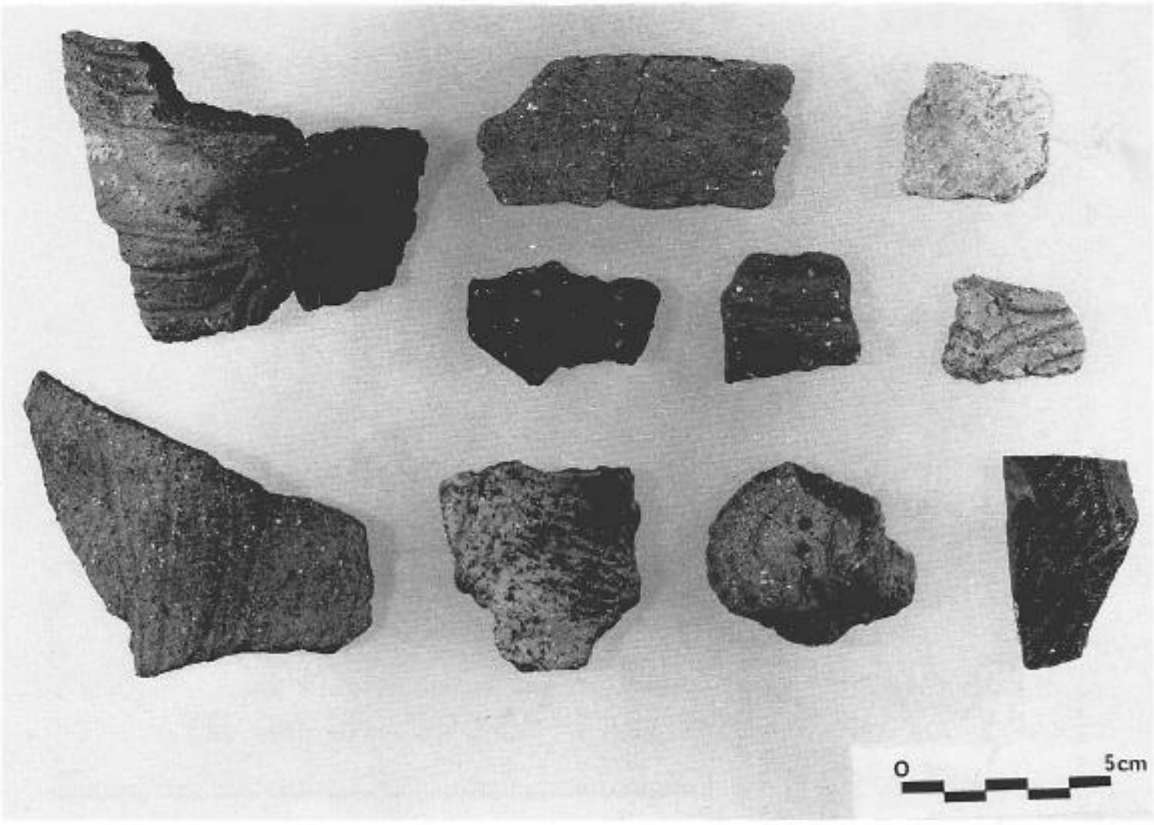
図版5　　大杉沢遺跡　上　溝状遺構
　　下　溝状遺構





図版6　　大杉沢遺跡　上　土壙
　　下　土壙





図版7　　大杉沢遺跡　上　出土石器
　　下　出土土器

2．県道本荘・西仙北・角館線バイパス建設事業

上雨堤（かみあまづつみ）遺跡

1．所在地　　仙北郡仙北町土川字上雨堤116番地他

2．面　積　　工事区域内遺跡面積　1,800㎡

3．期　間　　昭和60年５月16日・17日

4．調査担当者　　熊谷太郎

5．遺跡の立地と現況

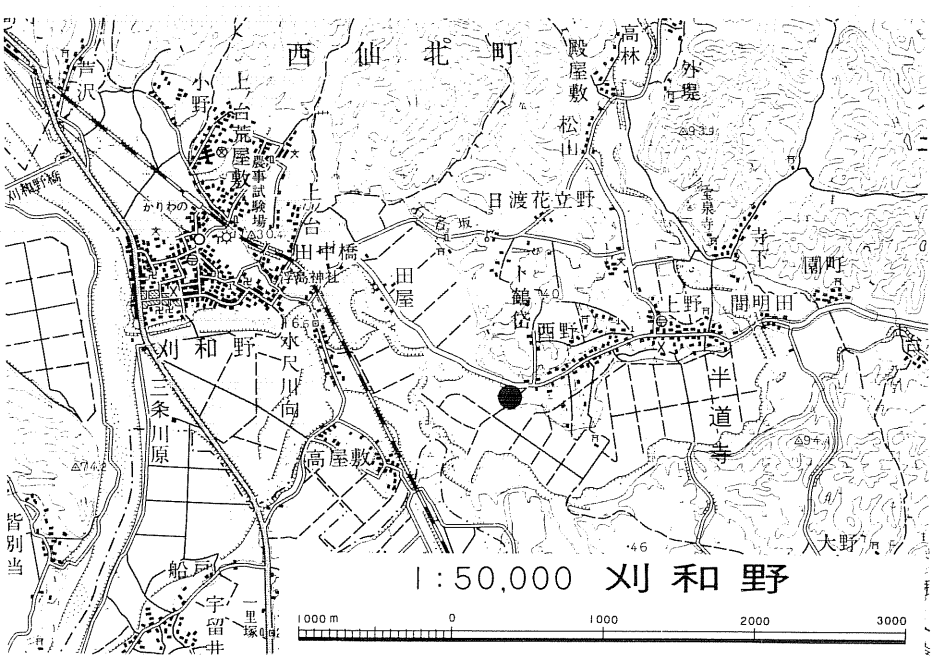
県道本荘西仙北角館線は西仙北町刈和野を経由し、雄物川の支流土買川によって形成された土川地区の河岸段丘の裾部に沿って東走する道路である。

遺跡は西野集落の西側、土買川の右岸に形成された標高30m の沖積地の西端部に所在する。現況は畑地と山林である。

6．範囲・時代・性格

踏査と試掘により土師器、須恵器片の遺物と溝跡の遺構を確認した。過去において路線内及びその周辺から縄文土器と石鏃、石斧の石器の採集が報じられていることから、縄文時代と平安時代の複合遺跡と判断される。

7．土　層　　表土層（黒色土）は30～40cmの厚さで、地山まではこれ一層である。



第14図　上雨堤遺跡位置図　　●印　遺跡

図版8　上雨堤遺跡　上　遠景
下　近景

4．鹿角市西山地区広域農免道建設事業

(1) 調査地区の概要

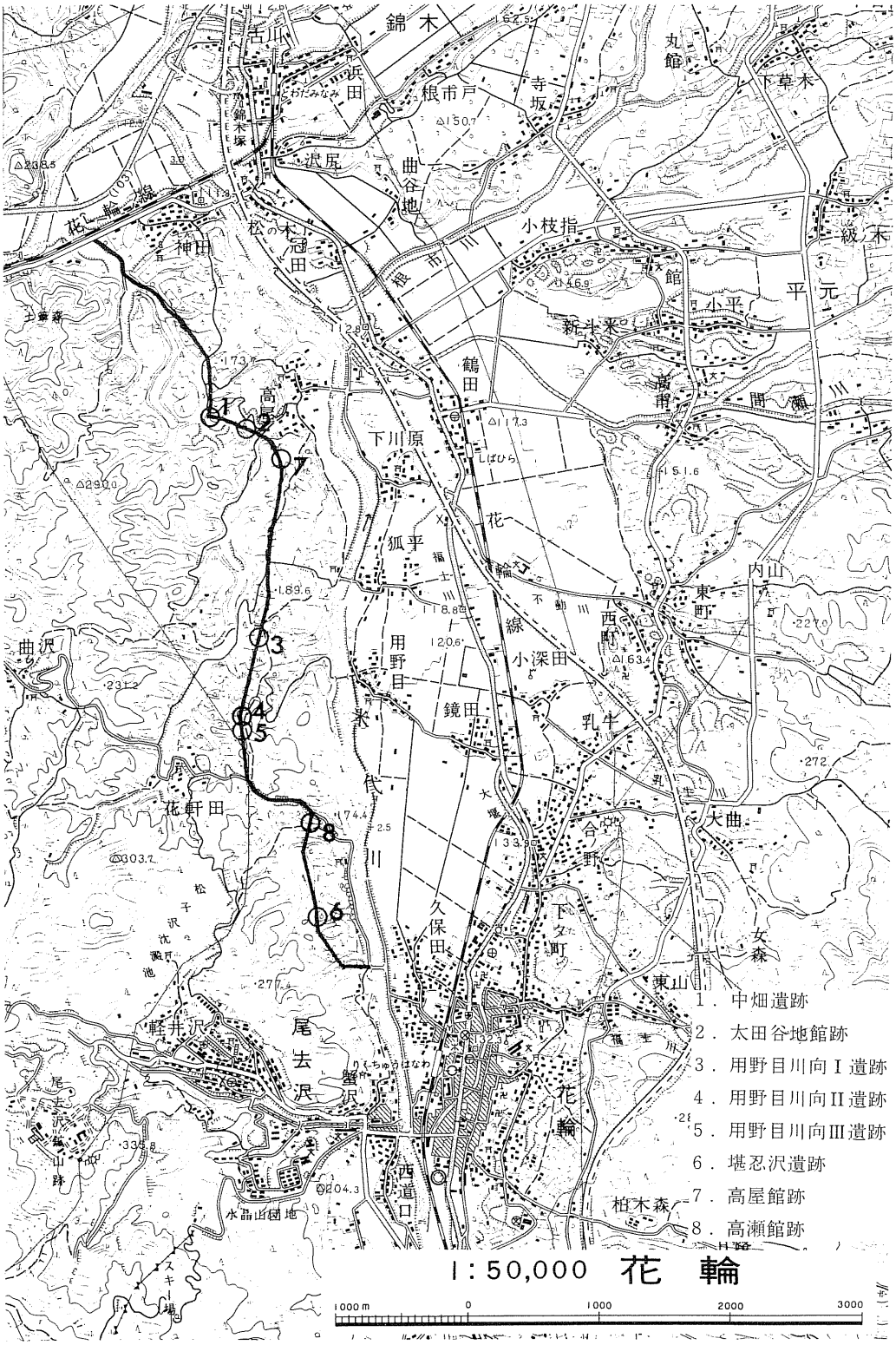
鹿角市西山地区農免道は、秋田県農政部鹿角農林事務所による久保田橋～神田林道間総延長6,515m、総事業費891,000,000円を予定している全幅7.0m、車道幅5.5mの米代川左岸の計画道路である。

この路線の通過する尾去沢から神田に至る米代川の左岸地区は、高屋周辺に標高150m程度の平坦面の認められる鳥越段丘が存在する以外はおおむね山地斜面である。

農免道路の通過するこれらの地区の遺跡は,この山地や段丘に深く入りこんだ沢に面した平坦面に立地しており、調査の結果4ケ所の遺跡が路線上に位置することが判明した。花輪盆地には42館、もしくは48館と称する多くの中世城館が存在するが、この地域にも多く、路線上の遺跡のうち3遺跡が館跡である。

(2) 範囲確認調査遺跡

番号	遺跡名(遺跡番号)	所在地	遺跡面積	調査期間	調査員	時代	摘要
1	中畑遺跡 (No.1)	鹿角市花輪字中畑		昭和60年10月14日～昭和60年10月19日	船木義勝 栗沢光男		路線内は遺跡と認定できず
2	太田谷地館跡 (No.2)	鹿角市花輪字中畑33-1	1,890㎡			中世	
3	用野目川向Ⅰ遺跡 (No.3)	鹿角市花輪字用野目川向					路線内は遺跡と認定できず
4	高屋館跡 (No.7)	鹿角市花輪字館ケ沢45	3,570㎡			縄文時代後期 中世	
5	堪忍沢遺跡 (No.6)	鹿角市花輪字堪忍沢	1,200㎡	昭和60年6月10日～6月12日	熊谷太郎	平安時代	
6	高瀬館跡 (No.8)	鹿角市花輪字堪忍沢字浦館字小森沢	750㎡			縄文時代 平安時代 中世	



第15図　西山地区広域農免道遺跡位置図

太田谷地館跡（遺跡番号No.2）

1．遺跡の立地と現況

遺跡は米代川の支流花軒田川に面し、分断された台地の南側の縁辺部に位置する館で、北・東・南側は急斜面である。西側には大きく深い空堀があり、さらに西側に小さく浅い堀と沢が入っている。

遺跡の現況は山林で、館の中心部と大きな空堀は太い杉の木立、その西側は杉の幼木林となっている。標高は155～157mである。

2．範囲・時代・性格

調査を必要とする範囲は1,890m²である。

中世の城館跡である。館の中心部は表土下30cmで遺構面に達する。第1トレンチでは掘立柱建物の掘形と柱痕跡、方形ないし長方形を呈する竪穴遺構などを検出した。台地と館の中心部を区画する大きな堀は、現況で上端幅約5～6.5m、下端幅約4～5.5mである。この大きな堀から約3～3.5m離れた西側に大きな堀と平行して走る小さな堀（溝）を第3・4・5トレンチで検出した。

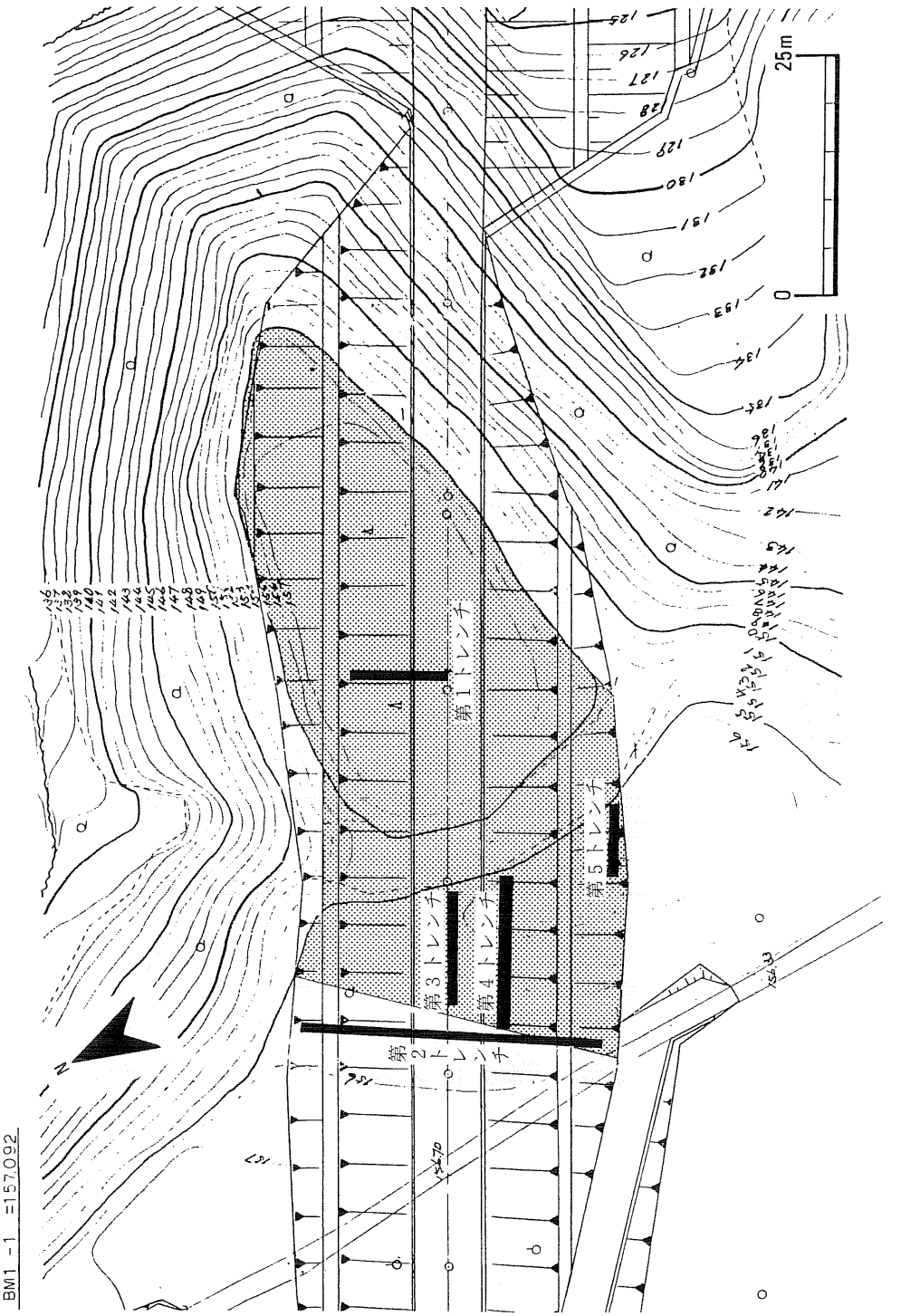
小さく浅い堀は幅約2.5～3mで、深さは60cm位である。大きな堀と小さい堀の西側は、浅い沢が南側から入るようであり、第2トレンチの南端では地表下2mまで観察できた。大きな堀に平行する小さく浅い堀の位置は館の中心部からみれば、大きな堀の外側に位置することになり、小さい堀がどのような機能を果したのか充分な精査が必要であろう。このように本館の中心部は、北・東・南側は急斜面により、西側は大きな堀、小さく浅い堀（溝）、沢によって仕切られていることがわかった。

出土遺物は、館の中心部から土師器甕の破片と思われる土器片が4点出土した。土器は小破片であり調整痕跡も明確でないので詳細は不明である。したがって、遺物からは時代を特定できなかった。

本遺跡の南西側には、本郭より広い郭が接し、空堀と土橋が良好な状態で保存されている。したがって、全二郭の館跡と復原できよう。

3．土層

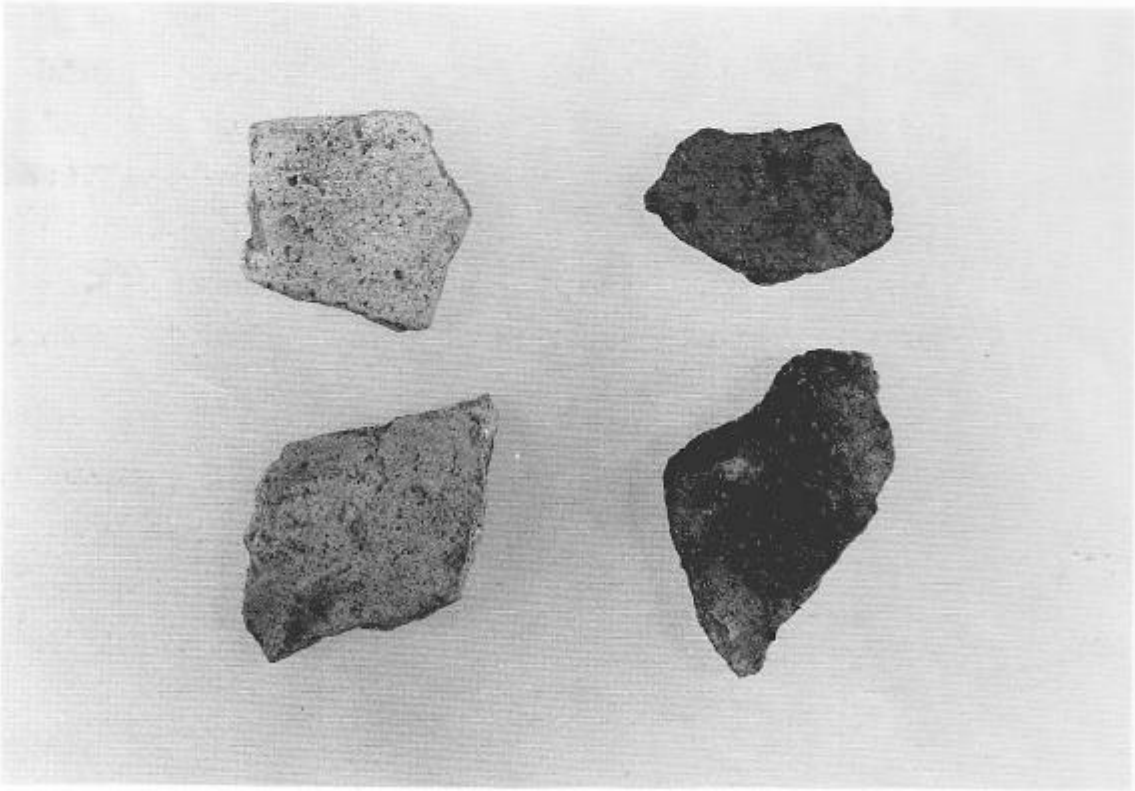
基本層位は第1層が黒褐色土、第Ⅱ層が地山である。なお、第Ⅰ層は館跡中心部で層厚30cm、遺跡の南両端で層厚約120cmとなっている。



第16図　太田谷地館跡範囲図

図版9　　太田谷地館跡　近景

図版10　　太田谷地館跡　上　第3トレンチ
　　下　第1トレンチ



図版11　　太田谷地館跡　上　第1トレンチの土壙
下　出土土器

高屋館跡（遺跡番号No. 7）

1．遺跡の立地と現況

高屋館は、米代川とその支流花軒田川に挟まれて北方向に舌状に張り出した台地の北端部に立地する4つの郭によって構成される多郭連続式の館跡で、「鹿角由来記」にある鹿角四十二館の一つである。その広さは東西500m、南北380mで本丸と伝承されている第Ⅰ郭は東西50m、南北15mと細長い。この主郭である第Ⅰ郭の北側には「蔵屋敷」と言われている約2,400㎡の広さをもつ腰郭部、第Ⅱ郭が附属している。南側には、幅10mほどの空堀に隔てられて長方形に近い形状を呈した第Ⅲ郭があり、さらに第Ⅲ郭の南側に幅12.3mほどの空堀を隔てて、4郭中最も広い第Ⅳ郭がある。

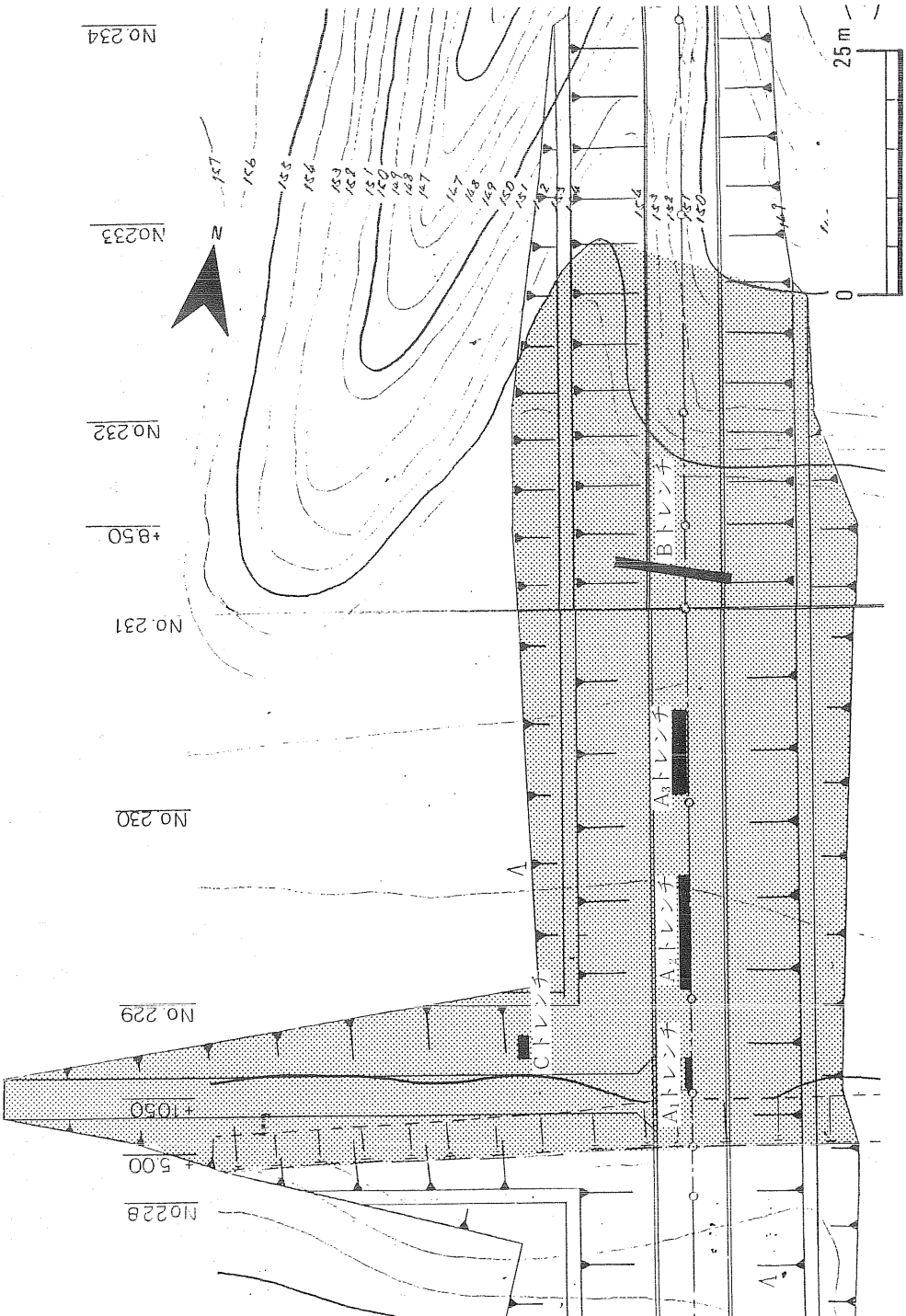
西山地区農免道はこのうちの第Ⅳ郭の東側を通る。この郭の西側は標高156mの平坦地で果樹園であるが、調査区となった東側は、標高158mの一段高い平坦地で杉や萱などが密生し容易に中に入れない荒地である。また南端部は、標高176mの小山の裾に接し、北端部は深い沢目に隔てられている。

2．範囲・時代・性格

調査区の5箇所にA_1、A_2、A_3、B、Cトレンチを入れて調査を行った結果、出土遺物は主に縄文時代後期の土器片や石器などで、他に土師器片が数点出土した。遺構としてA_3トレンチで礎石と考えられる幅14～68cmの石の配列を検出した。この石の配列は、南北が約3mほどあり両端が東方向に伸びていくようである。遺物や遺構から、本遺跡は縄文時代後期と中世城館であると言える。なおすべてのトレンチで浮石を検出した。調査を必要とする範囲は3,570㎡である。

3．土層

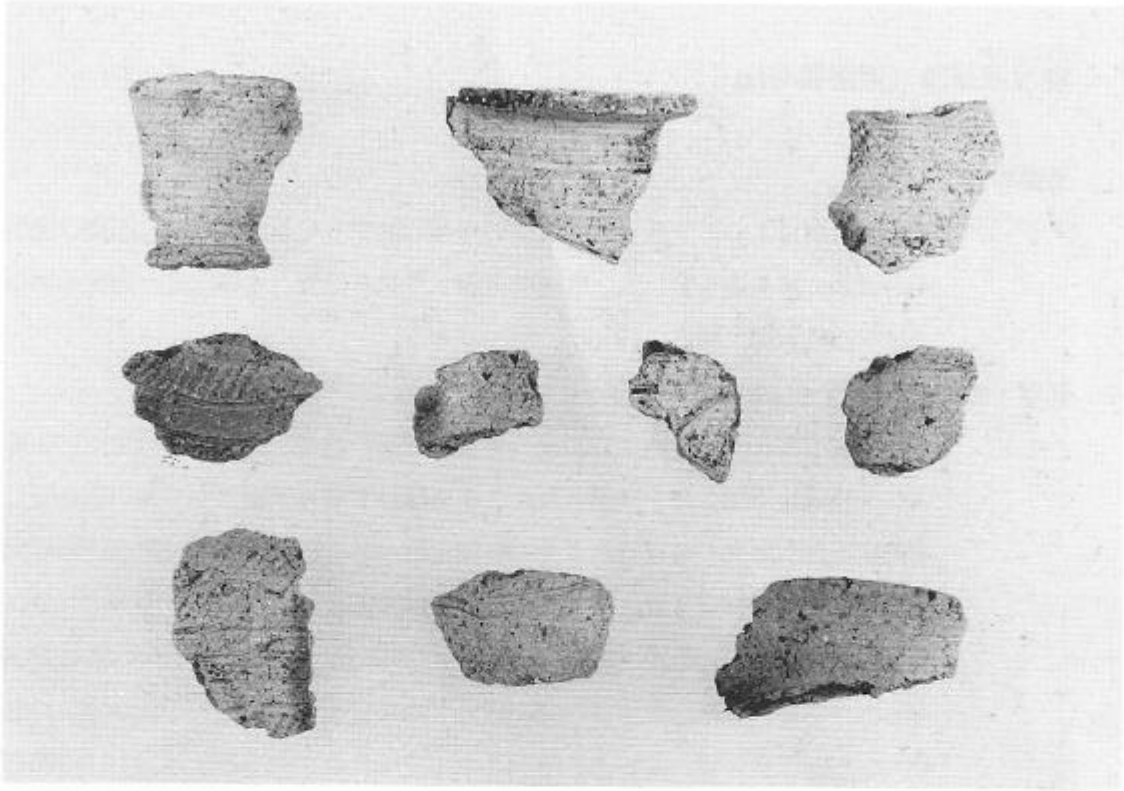
遺跡の基本層位は第Ⅰ層から第Ⅲ層までである。第Ⅰ層黒色土（遺物包含層）、第Ⅱ層黒褐色土（遺物包含層）で、この第Ⅱ層上面に浮石が部分的に堆積していた。第Ⅲ層黄褐色土（地山）となる。地山までの深さはA_1トレンチで31cm、Bトレンチで110cmであった。現表土面は平坦地形であるが、地山地形は南から北へ傾斜している。

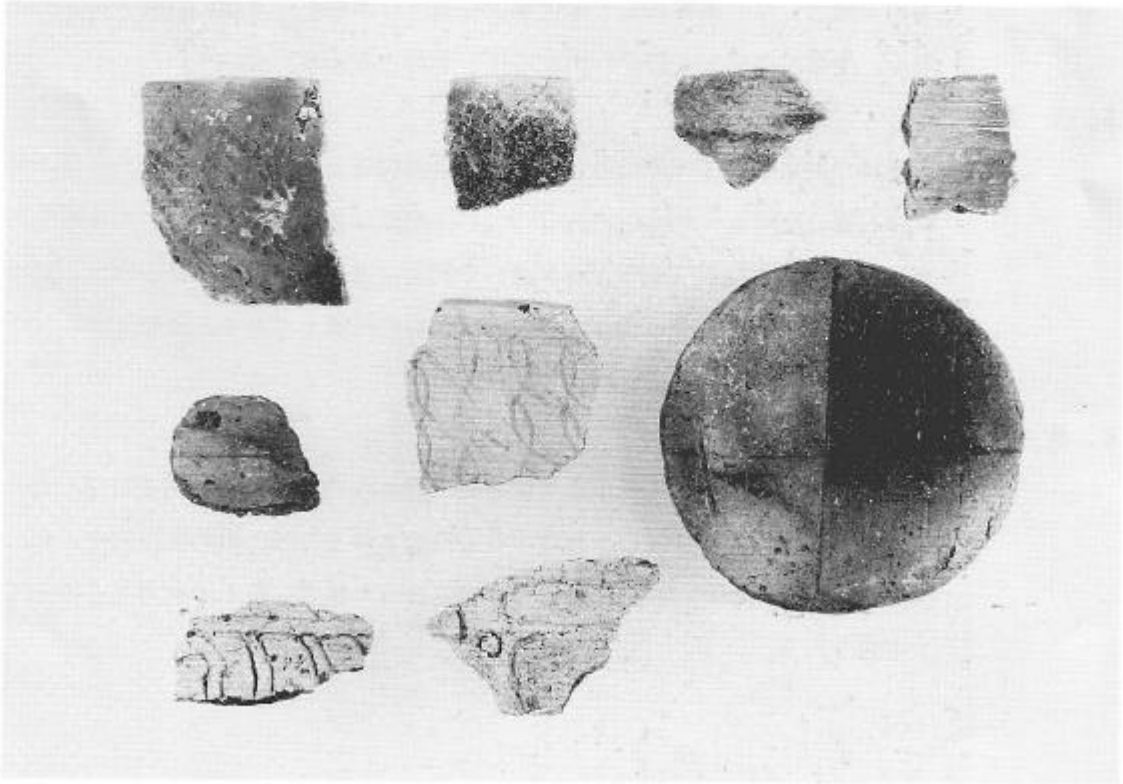


第17図　高屋館跡範囲図

図版12　　高　屋　館　跡　　上　南端近景
下　北端近景

図版13　　高　屋　館　跡　　上　Bトレンチ
下　A_3トレンチの配石





図版14　　高　屋　館　跡　　上　出土土器
下　出土土器

堪忍沢遺跡（遺跡番号No.6）

1．遺跡の立地と現況

遺跡は沢によって分断された台地の南側に位置しており、南側と西側は急斜面で沢地に落ち込んでいる。現況は南側が平坦な原野、北側は登り勾配の斜面で雑木林である。標高は170m～180mである。

2．範囲・時代・性格

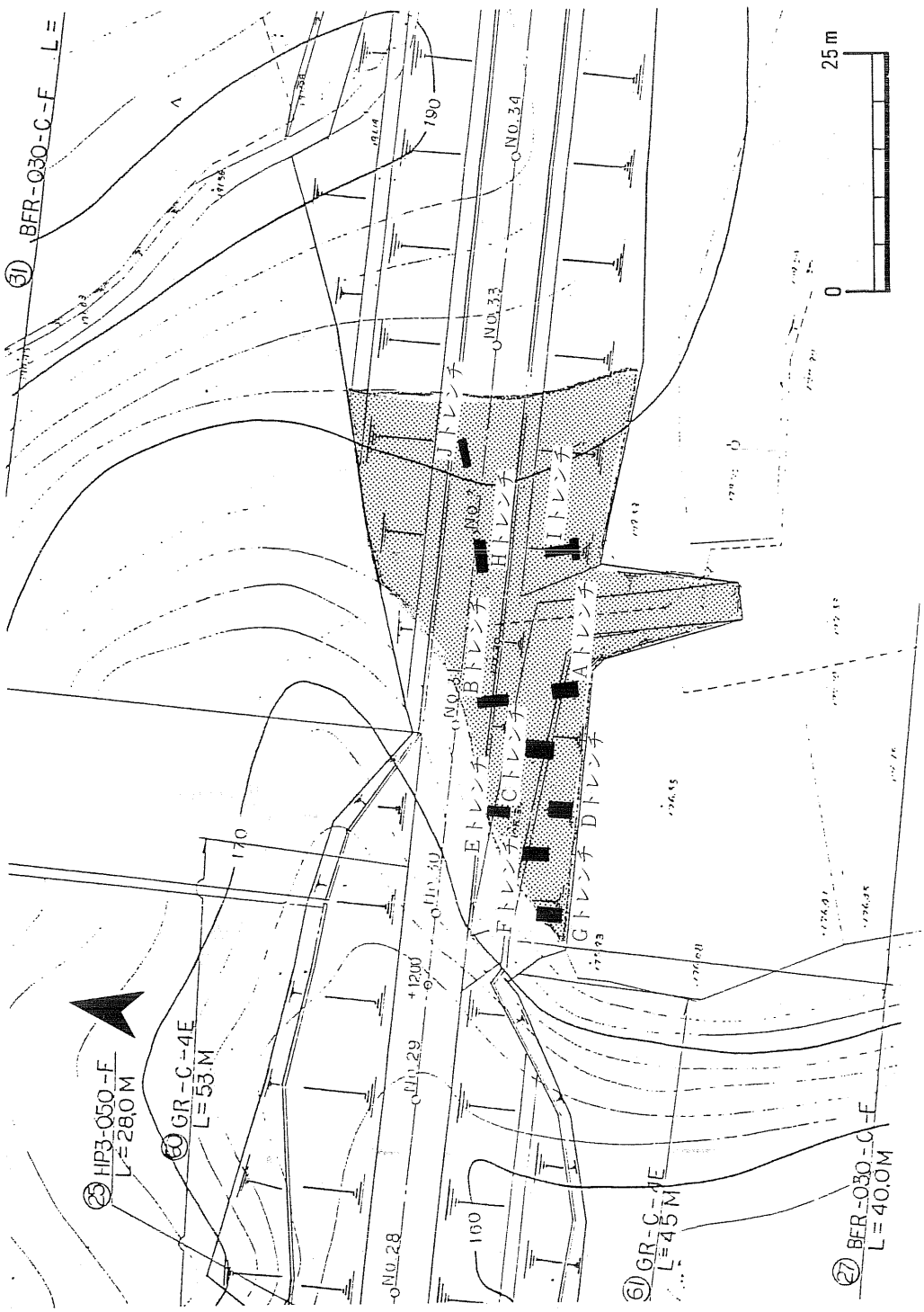
調査を必要とする範囲は1200㎡である。試掘の結果、南側の平坦地では土壙3基と竪穴状遺構1基が検出された。土壙はいずれも平面プランが円形を呈し確認面上及び周囲から比較的多量の鉄滓が出土している。竪穴状遺構の堆積土には焼土と炭化物が多量に混入している。出土遺物は土師器、須恵器とフイゴの羽口で、特に平坦地の北側の区域に集中していた。北側の斜面では炉状遺構が検出された。遺構は平面プランが円形を呈する土壙状のもので、周囲に白色粘土がリング状に巡っている。粘土は本来筒状にのびていたと思われ、確認段階では上部が崩壊していた。その他3箇所で焼土が円形にやや厚く堆積しているのを検出した。遺物としては斜面の南側及び西側から多量の鉄滓が出土している。本遺跡は出土土器から平安時代の遺跡と考えられる。

3．土　層

遺跡の基本土層は4層である。第1層は黒褐色土（層厚10～13cm）、第2層は浮石層（層厚3～5cm）である。これは地点によっては欠落している所もある。第3層は黒色土（層厚3～5cm）で斜面付近で主として検出された。第4層は暗褐色土（層厚5～10cm）で地山は黄褐色粘質土である。遺物は第1層下面から第4層上面にかけて出土した。

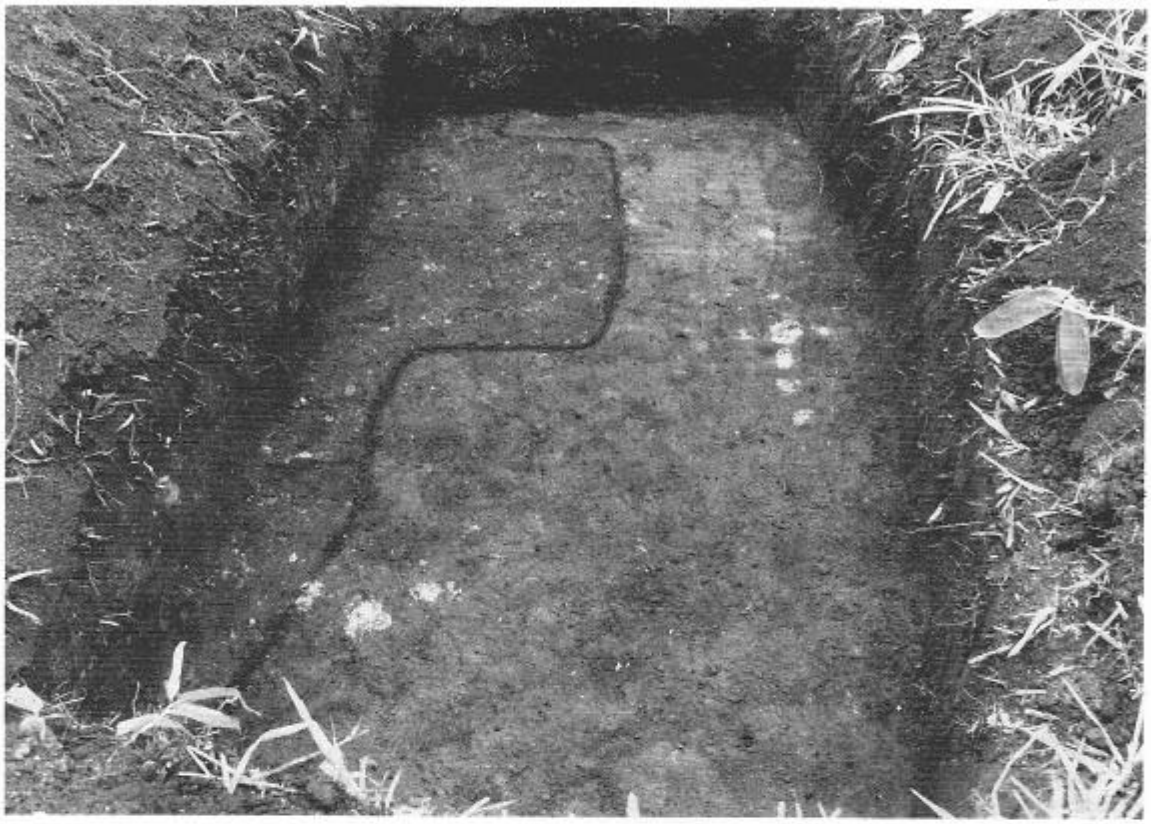
4．所　見

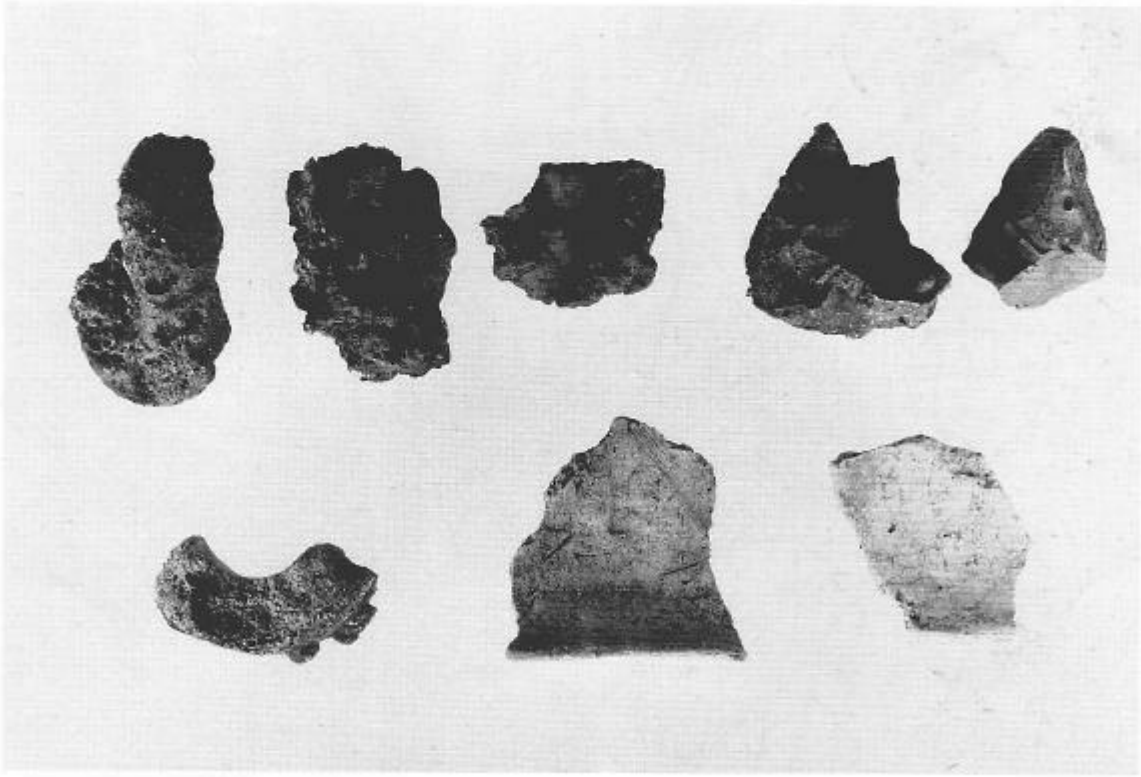
堪忍沢遺跡は製鉄を主とする生産遺跡と考えられ、遺構は台地上の平坦面のみならず、北側の斜面地にも存在すると推定される。又、斜面地は立木と杉の伐採根が残っており、調査にあたってはこれらの除去に多くの労力を必要すると判断される。



第18図　堪忍沢遺跡範囲図

図版15　　堀忍沢遺跡　上　遠景
　　下　土壙





図版16　　堆忍沢遺跡　上　竪穴状遺構
　　下　出土土器・鉄滓

高瀬館跡（遺跡番号No.8）

1．遺跡の立地と現況

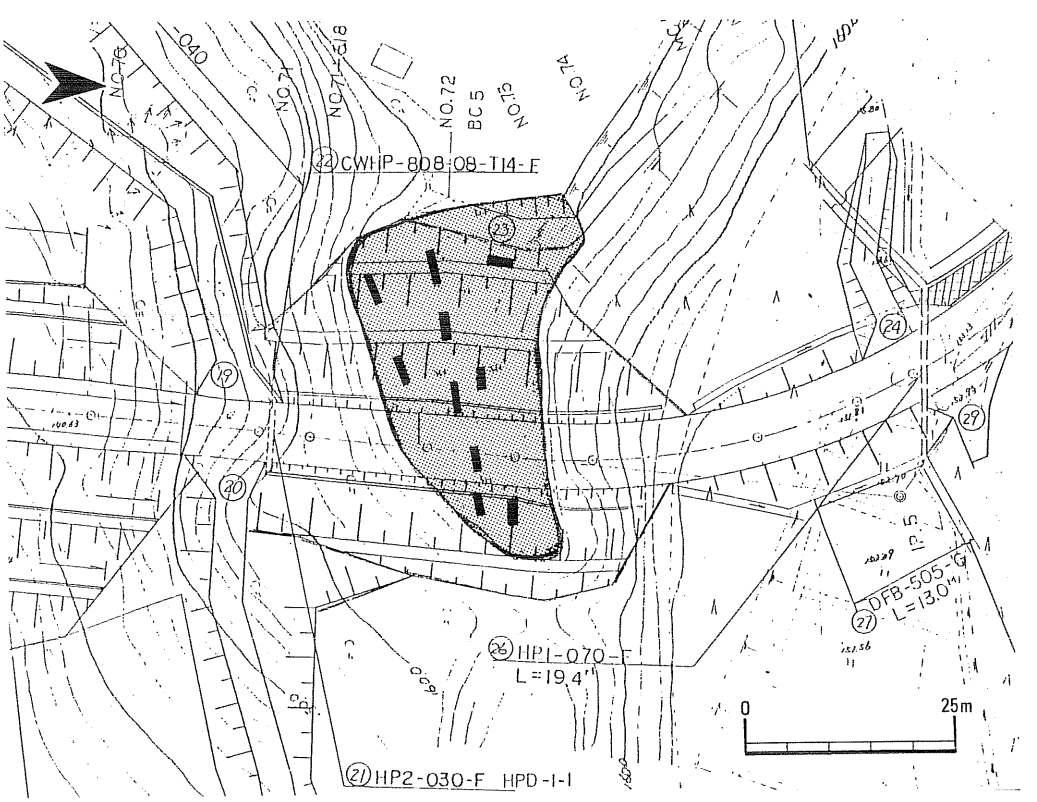
遺跡は東に向って尾根状に張り出した台地上に位置する館跡である。北側は長根林道の谷に、南側を小森沢林道の谷に区画された地域で、調査区の標高は170ｍ、現況は平坦な草地である。

2．範囲・時代・性格

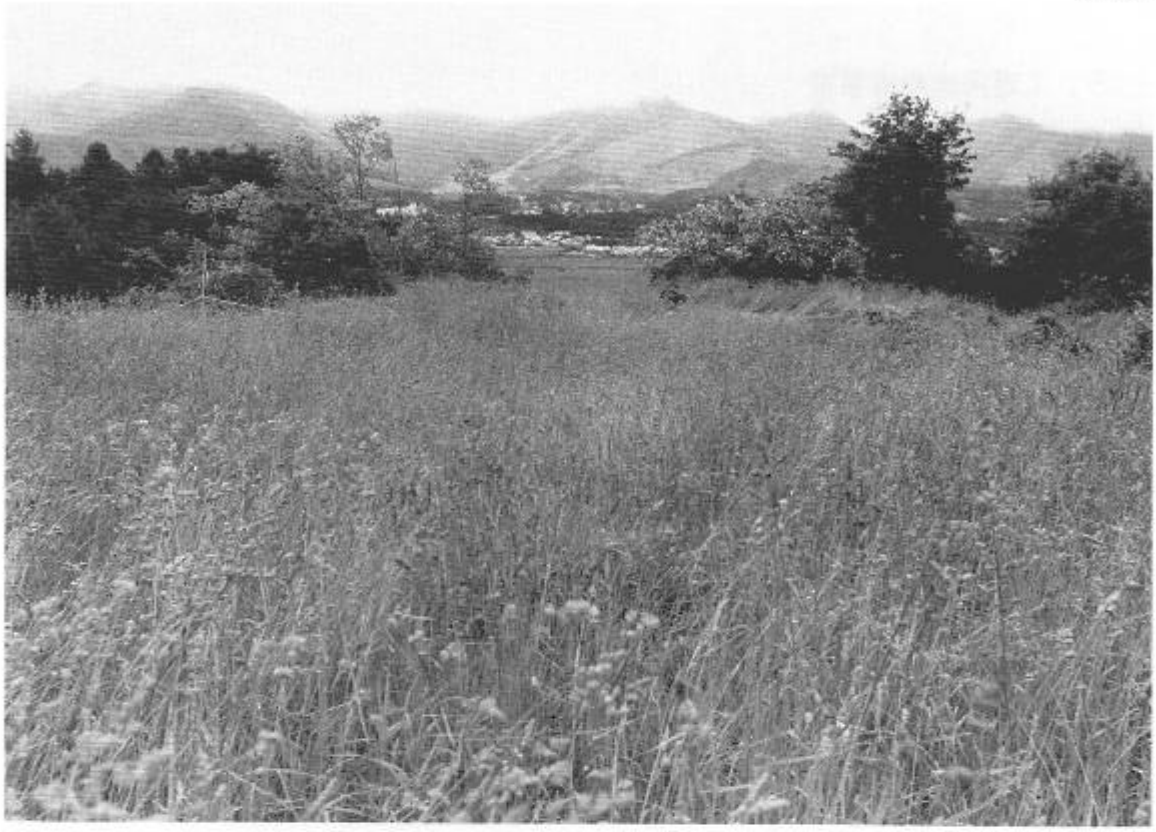
調査を必要とする範囲は750㎡である。遺構としては溝１条、遺物は縄文土器細片と鉄滓である。館跡として周知されている遺跡であるが、縄文時代、平安時代との複合遺跡と思われる。調査区西側には空堀を隔てて附属する郭が続いている。

3．土　層

遺跡の基本土層は２層である。第１層は黒褐色土（層厚２～５cm）、第Ⅱ層は暗褐色土（層厚５～10cm）である。以上のように表土層は比較的薄く、これは過去に耕地としての整理が行われたためと考えられる。



第19図　高瀬館跡範囲図



図版17　　高　瀬　館　跡　　上　遠景
下　溝状遺構

5．工場用地造成事業

岳下（だけした）遺跡

1．所在地　　仙北郡神岡町神宮寺字小沢17～19

2．面　積　　工事区内遺跡面積 4,640㎡

3．期　間　　昭和60年４月15日～27日

4．調査担当者　　小林　克

5．遺跡の立地と現況

岳下遺跡は雄物川の中流域、横手盆地の西端にある。横手盆地を北に流れる雄物川は、盆地の出口神岡町―大曲市の付近で北から流れてくる玉川と合流する。岳下遺跡はこの合流点からおよそ１km西へ下った、雄物川左岸の段丘上にある。遺跡付近は神宮寺嶽の裾をめぐってできた沢が雄物川へ流れ込む箇所にあたり、南から北へ向って開く形の扇状地が形成されている。遺跡の標高は、およそ25m である。

神宮寺嶽の西麓には、３個所の遺跡が存在する。岳裾、岳下、愛宕下の各遺跡である。これら３遺跡のうち、岳下遺跡の東側に沢をはさんで隣接する岳裾遺跡は、昭和40年、豊島昂氏によって発掘調査が行われている。調査の結果、縄文時代晩期の組石棺２基が検出されている。

今回調査の対象となった区域は、面積が10,000㎡の神岡町が所有する土地である。一部は杉の植林地として利用されており、他は以前耕作が行われた痕跡をとどめている。

6．範囲・時代・性格

岳下遺跡の範囲確認調査は、調査対象区域に合計６本の幅１ｍ、長さ 100 ｍのトレンチを東西方向に設定して行った。各トレンチの間隔は10m をとっている。６つのトレンチは南側からＡ～Ｆのアファベット名を付け、それぞれのトレンチ内は西側から２ｍ間隔で区切って１～50の番号名を付けた。各トレンチは、重機によって萱根の多く混じる表土を取り除き、その後人手によって掘り進んで、遺物の採集、写真の撮影を行った。

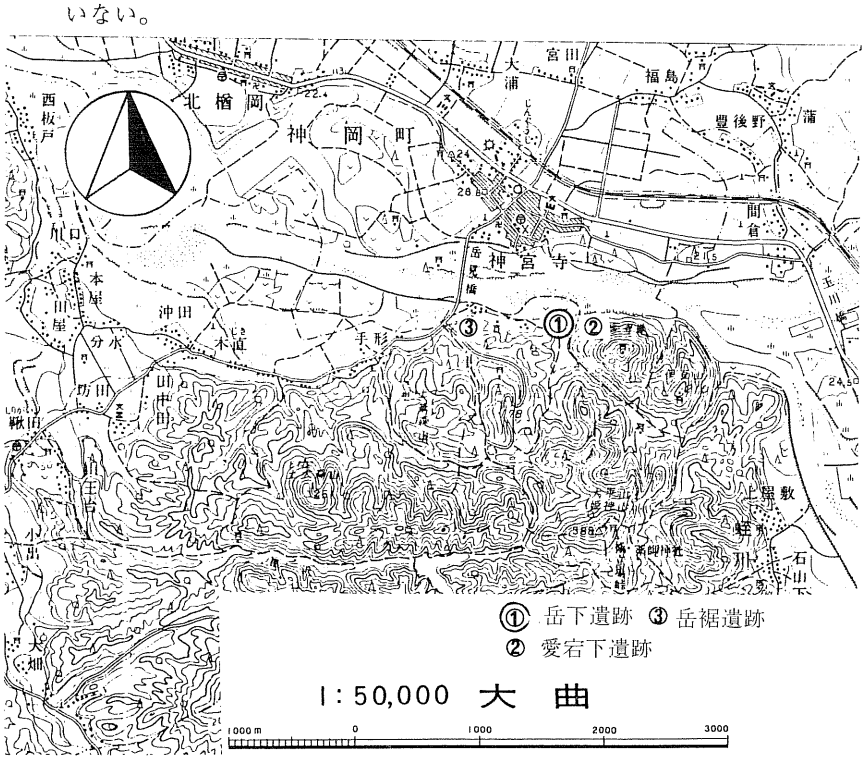
出土した遺物は全て縄文時代晩期に属する。東北地方縄文時代晩期の土器型式である大洞Ｂ～Ａ式の各期の遺物が含まれているが、概してその前半期である大洞Ｂ式、ＢＣ式、C_1式のものが多い。

第1表は、出土した遺物を各トレンチおよび2m間隔の区画ごとに重量を計測した結果であり、それを折れ線グラフに表示したものである。遺物の集中する箇所は、南から北、すなわちAトレンチからFトレンチへ向うにしたがい、トレンチ両端から中央寄りへと次第に移っている。また各トレンチ内での遺物量の多い部分では、小刻みな量の変化が繰り返されている。以上のことから、岳下遺跡の範囲は第2図に示すような形状をもって括ることができるし、さらに遺物の分布する区域が面的に均等に広がらずに、局所的な集中箇所をもつことはそれらの下部に住居跡、墓壙等の何らかの遺構の存在も予想される。

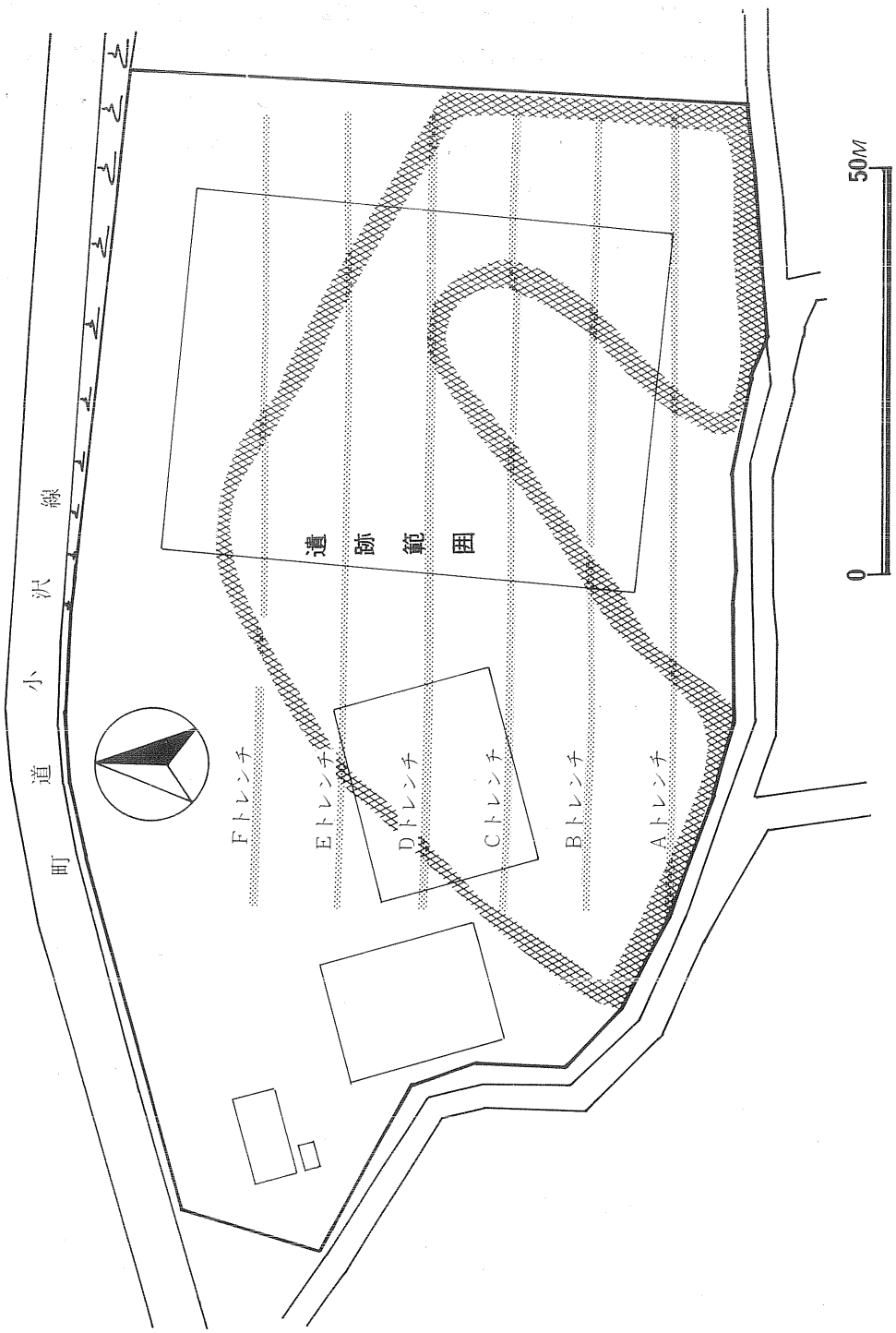
今回は遺跡の範囲を知ることが主たる目的であったため、具体的に遺跡の性格を示す遺構の検出までは行わなかったが、写真に示す埋設土器がBトレンチから出土しており、岳下遺跡は縄文時代晩期の墓域である可能性が考えられる。

7．土　層

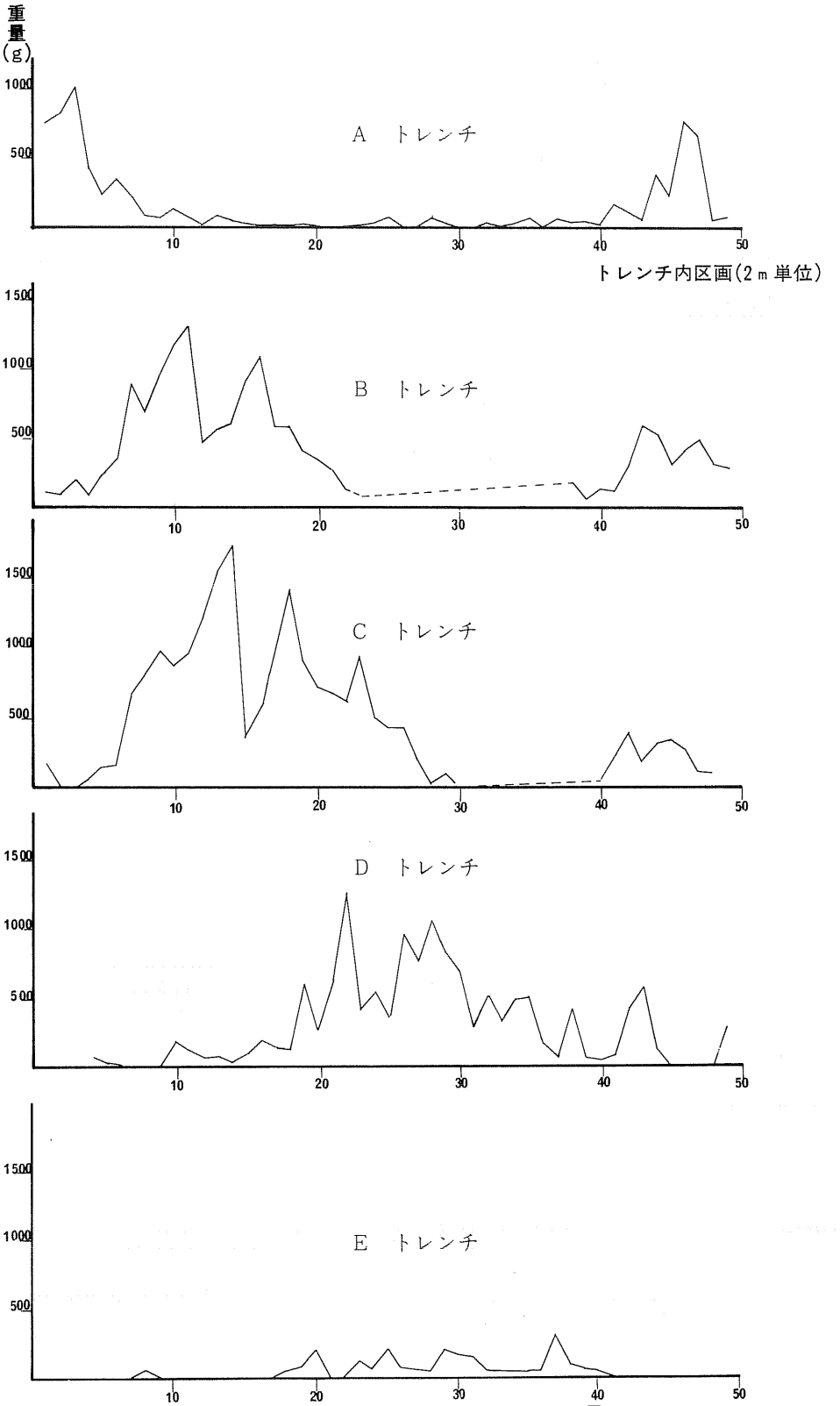
表土は暗褐色を呈する。厚さ10～20cmで、萱の根などの植物根が多く入る。遺物はこの表土中にも包含されるが、表土下の黒褐色土中から多く出土する。黒褐色土は厚さ20cm程で堆積し、遺物とともに多量の炭化物、焼土などが混じる。黒褐色土下は拳大の礫を含んだ褐色土層である。この層には遺物は包含されていない。



第20図　岳下遺跡位置図



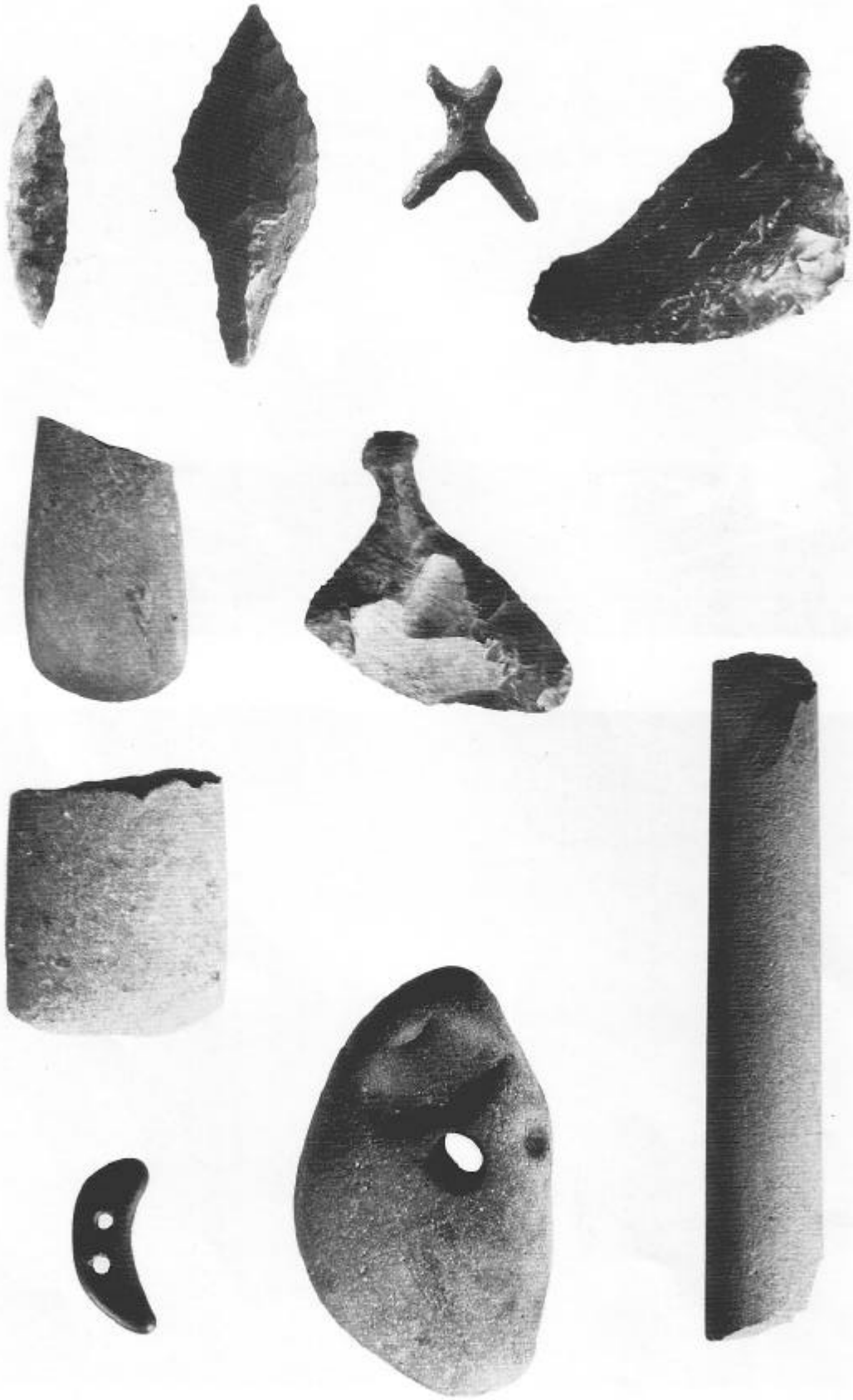
第21図　岳下遺跡範囲図



第２表　岳下遺跡各トレンチの遺物出土量

図版18　　岳　下　遺　跡　　上　遠景（雄物川の対岸から）
下　遠景（神宮寺岳山頂から）

図版19　　岳　下　遺　跡　　上　調査状況
下　埋設土器出土状況



図版20　　岳 下 遺 跡　　出土石器・石製品

図版21　　岳　下　遺　跡　　出土土偶・土製品

図版22　　岳 下 遺 跡　　出土土器

年子狐（ねんねこ）Ⅱ遺跡

1．所在地　平鹿郡平鹿町中吉田字年子狐140の他

2．面　積　10,000㎡

3．調査期間　昭和60年9月25日～10月5日

4．調査者　山田貞吉

5．遺跡の立地と現状

横手盆地の中央平野部にあり、平鹿町の中心地浅舞の東北東約2.5kmの所にある。この地域には清水川（しずかわ）が蛇行して北に流れていたが、現在は「M2幹線用水路」と呼ばれている。遺跡はこの幹線の右岸にあり標高60mである。

遺跡の北には上藤根遺跡、南には小川をへたてて年子狐Ⅰ遺跡があり、古代の遺跡が連続して存在する地域である。

遺跡の現状は畑地、荒地、宅地となっている。

6．範囲・時代・性格

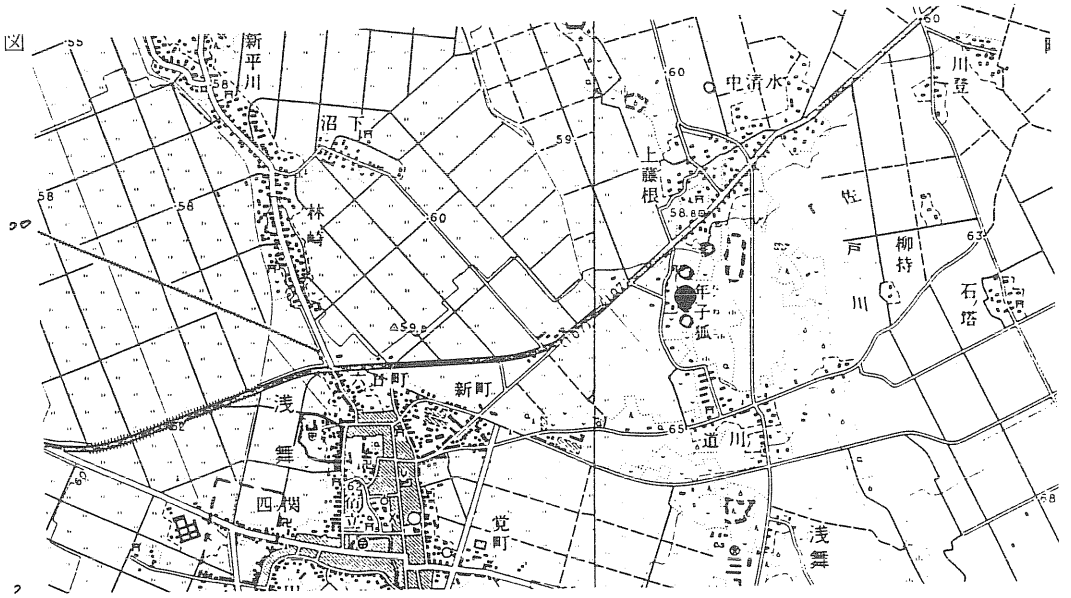
調査はトレンチ、坪掘りを行って範囲を推定した。その範囲は第22図のとおりである。試掘調査の結果、溝状遺構4条、性格不明（建物にはならないと思われる）のピット等が確認された。

溝は3条が東西に走り、他の1条は南北に走る。東西に走る3条の溝の一つは幅25cm、深さ50cmで溝の中から土師器の甕形土器の底部の破片などが出土した。南北に走る溝は幅25cmほどで浅く、東西に走る溝より新らしい。

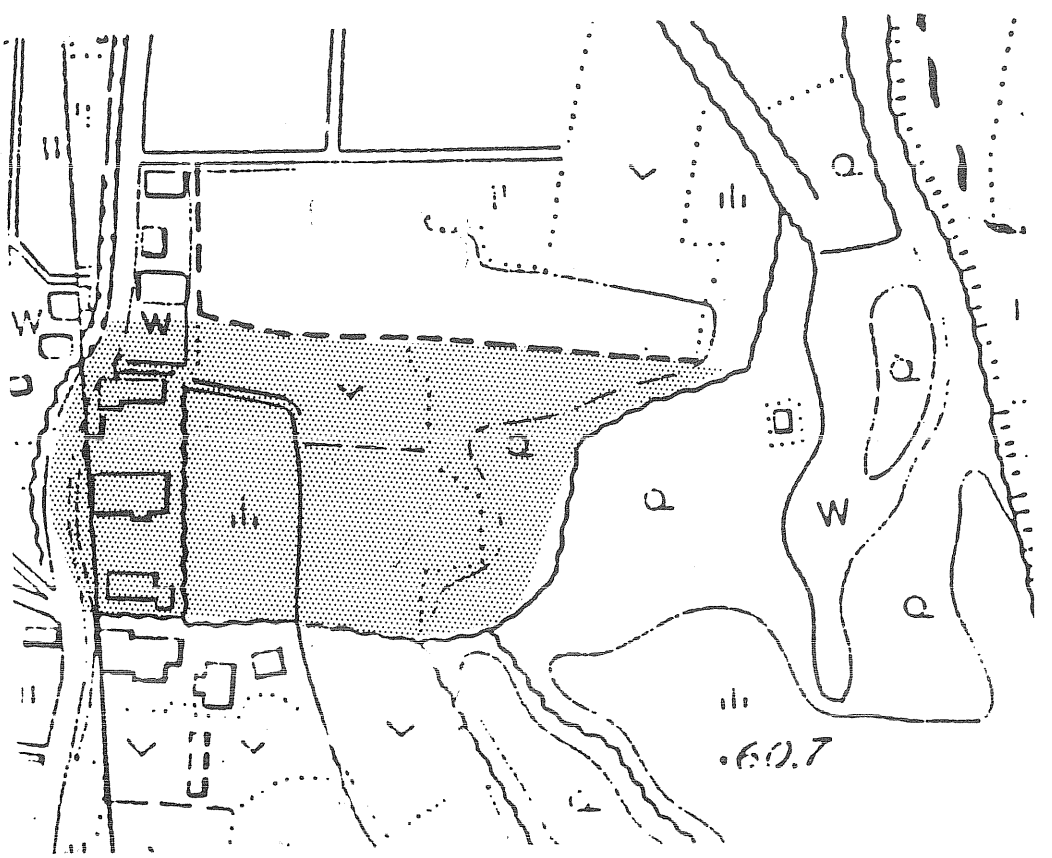
出土した遺物には土師器の杯形土器（内黒）破片、甕形土器破片、須恵器甕破片、紡錘車などがある。このことから奈良時代中頃のものと考えられる。昭和59年の調査で竪穴住居跡が確認されていることから集落跡と考えられる。

7．地層（深さ）

第一層は表土（耕作土）で厚さ20cm前後、第2層は暗褐色土で厚さ50cmでその下は地山（ローム層）である。

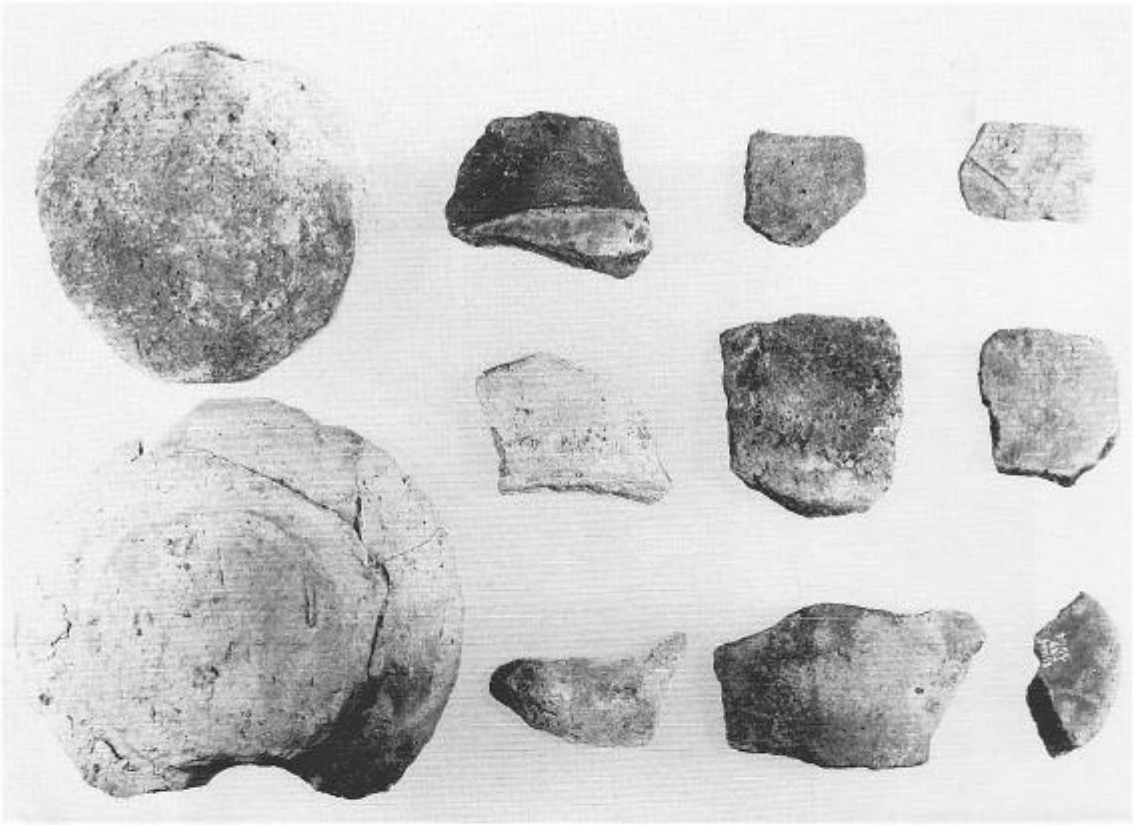


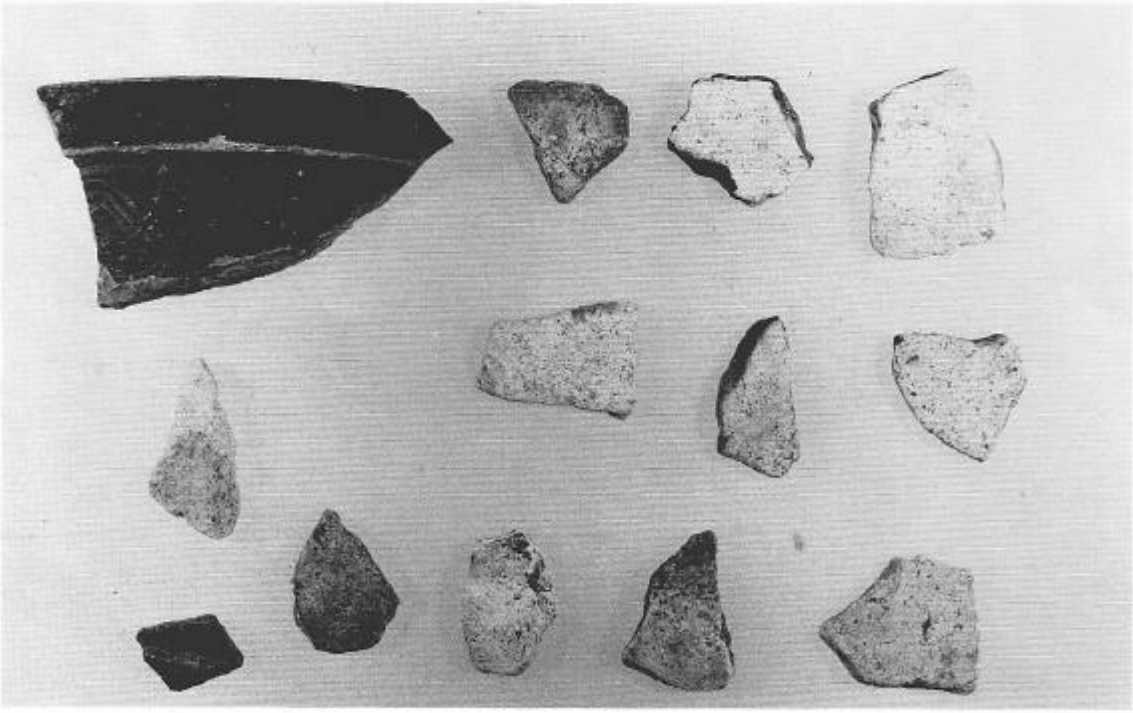
第22図　年子狐Ⅱ遺跡位置図



第23図　年子狐Ⅱ遺跡範囲図

図版23　　年子狐Ⅱ遺跡　上　調査状況
　　下　溝状遺構





図版24　　年子狐Ⅱ遺跡　出土土器